

41418

教科書文庫

4

810

41-1933

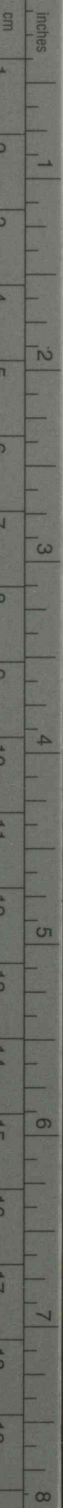
2000301710

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

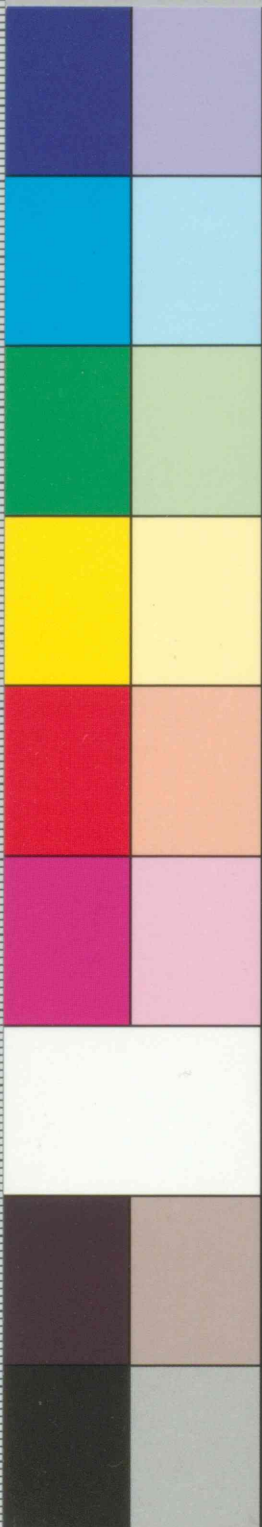
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

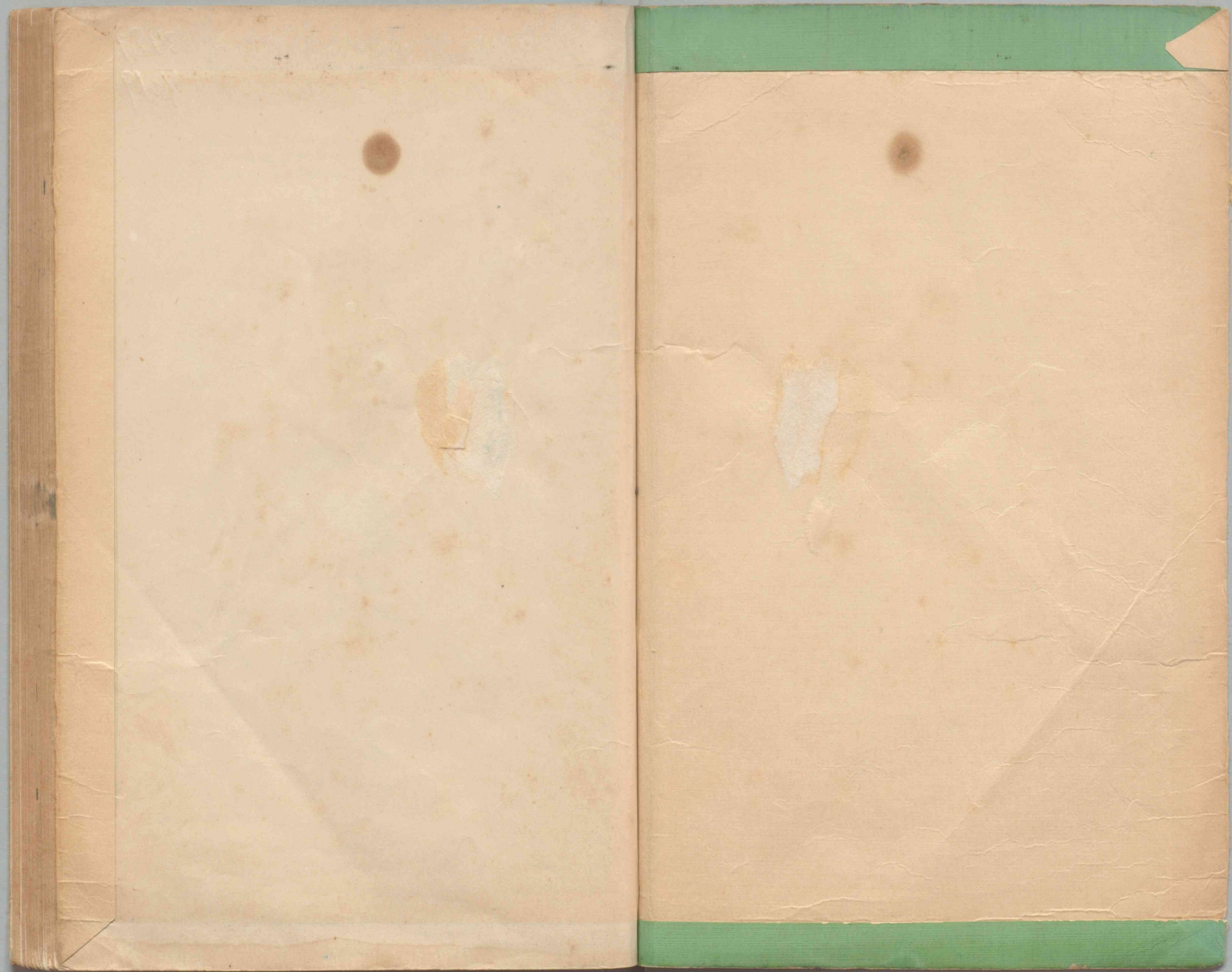


3759
Y019
資料室

新國文讀本

卷一





資料室

375.9
4019

文部省檢定濟

中學國語教科書 昭和八年一月十三日
實業學校國語教科書 昭和八年七月三十日

吉田彌平編

新國文讀本

卷一

東京 光風館藏版



例言

一本書は中學校及び實業學校に於ける國語科の講讀用教科書として編纂したものであります。

一本書は現代文を經とし、各時代の代表的文學を緯とし、専ら生徒の學習能力を基準としてこれに適應するやうに組織しました。

一本書は又書牘文の實用的價值に鑑み、諸大家の名文十數篇を選び、その程度に應じて、これを各卷に按排しました。

一本書の用字、送假名、句讀などはすべて國定教科書に準據いたしました。

一 地圖・繪畫・寫眞などで本文の理會に必要なものは、成るべくこれを本文の内又は鼈頭に挿入しました。肖像や筆蹟なども、賢哲名流の俤を偲ぶよすがになるものは、つとめて取入れました。

一 諸家にはそれ／＼諸家独自の文體があります。苟もこれに手を觸れてはならないことは申すまでもありませんが、本書の性質上まことに已むを得ない場合には、多少手を加へました。これについて賜はりました諸家の雅懷に對し、茲に謹んで感謝の意を表するものであります。

昭和七年八月

新國文讀本卷一

目次

一	昭和の黎明	北原白秋	一頁
二	菊の香	石井國次	四
三	競漕	久米正雄	三
四	三つの肉弾	小笠原長生	六
五	比叡の鳥	高濱虚子	五
六	菖蒲の節供	島崎藤村	元
七	雑草の花	服部純雄	四

八	苗	相馬御風	哭
九	湖山長者	五十嵐	力 五
一〇	寓言	かんにん	天
		柳澤淇園	天
		愚公の山	天
		室鳩巢	天
一一	漸進	八波則吉	天
一二	リンカーンの少年時代	内ヶ崎作三郎	天
一三	惜陰	盛年ハ重ネテ來ラズ	天
		少年ハ老イ易シ	天
一四	スポーツ美談	原文 陶	天
		原文 朱	天

一五	鐵棒	櫻井忠温	天
一六	垣巡	夏目漱石	天
一七	先賢佳話	原文 原念齋	天
	野中兼山	青木昆陽	天
	富士登山	萩原井泉水	天
一九	二兒へ	大町桂月	天
二〇	新秋頌	西條八十	天
二一	ツエッペリン伯號に乗りて	圓地與四松	天
二二	鷹山公	原文 重野成齋	天
二三	至孝	原文 重野成齋	天

好	學	原文	安井息軒	一四
節	儉	原文	江木鰐水	一四
二三	安井息軒	森	鷗外	一七
二四	草雲雀	横山	桐郎	一五
二五	月の天橋	徳富健次郎		一五



新國文讀本 卷一

北原白秋

詩人
歌人
名は隆吉
明治十八年福岡縣柳
河生

一 昭和の黎明

北原白秋

黎明しのけ來れり、

凜たる黎明。

げにくく日の御子、

光り立たせり。

萬歳、萬歳、萬歳。

仰げよ、青雲、

新し、ふたゝび。

われらが大君、

若くいませり。

萬歳、萬歳、萬歳。

世界よ、輝け、

崇き稜威に。

充ち満て、ひとつに、

國は和したり。

萬歳、萬歳、萬歳。

昭和の御代こそ、

榮あれ、いよゝ。

げにゝ若きは、

光る空なり。

萬歳、萬歳、萬歳。

仰げよ、讚へよ、

凜たる黎明。

われらが大君、

若くいませり。

萬歲、萬歲、萬歲。 (青年日本の歌)

石井國次

教育家

學習院教授

明治七年茨城縣下妻

町生

二 菊の香

石井國次

我が天皇陛下の允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せらるべき聖徳を具へさせ給ふことは申すも畏きことながら、御幼少のをり、學習院御在學中の御事どもを拜し奉るにつけても、まことに感佩に堪へぬことが多いのであります。
カミじけなき御事深く心に感ず。

まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられることとであります。私は今まで多くの學生に接して参りましたが、陛下のやうに御記憶の強いお方は御見受け申したこ

とがありません。蟲の名でも、貝の名でも、聯絡も系統も無い事まで、一度御覚えになつた以上は、決して御忘れになるといふことはありません。

かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもいゝ加減にして置かれる事が御嫌ひで、詳細に御質問になり、又御自身徹底的に御研究になるのであります。例へば歴史で聖徳太子の御事蹟を申し上げると、御歸りになつて参考書を御調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の御話を申し上げると、蝶類圖説を御調べになつたり、澤山御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御

280.
三寶

佛法僧

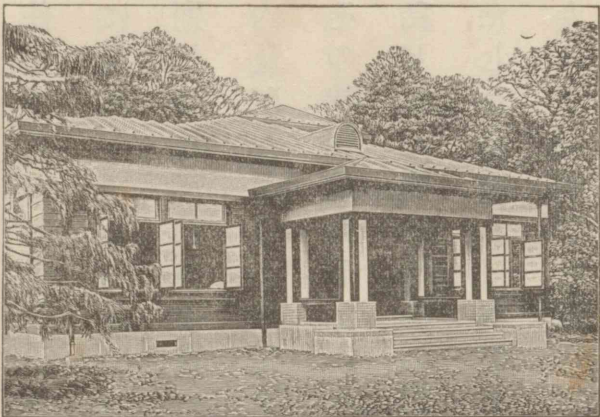
聖徳太子の憲法の第二條に「篤く三寶を敬へ」とある

觀察になる。電氣の御話を申し上げれば、種々の器械を御取寄せになつて御實驗遊ばされ、無線電信、電話の事までもすつかり御理解になるといふ風であります。旅行登山の御趣味も御豊富にあらせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよく御調べになり、其處の産物や動物、鑛物から氣象の事までも熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識の確實で且深みがあらせられる事は、實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮に參拜して、明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀したものは、誰でも其の御質素なのに感激しいものは無いと思ひますが、陛下も亦其の御遺傳のためか、

明治神宮
明治天皇昭憲皇太后
を奉祀する神社
東京市澁谷區代々木
に鎮座

御感化のためか、華美が御嫌ひであらせられます。それで



生 物 學 御 研 究 所

すから、御學用品等も全く一般學生と同様な品を御使用になり、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使用になりました。しかもそれがごく短くなるまで決して御棄てになりません。消ゴムも當時四五錢位のを、豆粒ほどになるまで御使用になり、雜記帳でも、半紙や畫用紙でも、すこしもむだには遊ばしませんでした。それで、大正三年三月初等

リボン
Ribbon

科御卒業のをり、御高德を一般兒童に拜せしめたならば國民教育に裨益するところがあるだらうと考へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から帳面、鉛筆、消ゴム、並に御製作になつた手工品、圖畫、標本等を拜借して一室に陳列し、御教室、御控室等すべてを公開して、一週間にわたり、市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。その時、毎日何千といふ兒童が校長、教員に連れられて参り、私どもは手分けをして種々説明を致したのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女の子でかなり綺麗な服裝をして、幅の廣いリボンなどをつけて來た一組がありました。私が其の女生徒たちに説明をして

から後、皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンだのを家庭でおねだりは出來ないでせうね」と申したら、たいそう感激して、中には泣いた生徒も随分ありました。陛下は又紀律正しいことが御好きであらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入浴、御寢まで、實に規則正しい一日の御日課を御守りになつて、容易に御變更になる事はあらせられません。随つて色色の事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばすといふ風であらせられます。陛下は又實に公平無私であらせられます。例へば、戦争ご

つこをやつたあとで、私が其の審判や講評などを致します時、御自分の方に不利な事がお有りになつても、少しもお包みなく御申出でになる。角力で、陛下がお相手をお投げ遊ばして、軍配が御自分に揚つても、行司の氣づかなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、私に踏切があつたから負です。と御主張になる。審判者や行司が少しでも不公平な判定をすると、非常に御嫌ひになる。仲間の者が、其の方が御都合がお宜しいではございませんか。などと申し上げると、そんな不正直な事はいけない。と仰せになる。随つて、歴史上の事柄を御批判遊ばす時など、實に理路井然、**公明正大**で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下

の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、**正邪善惡**の姿がはつきりと顯れて、隠すことは出来ないであります。陛下は非常に御仁心が深くあらせられます。どちらかと申せば御口數の少い方で、餘計なことは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。随つて御幼少の時分から、普通の子供に有りがちな友達にからかふとか、意地悪い事をするとかいふやうなことは決してお有りになりませんでした。そして御學友に對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍従武官などにも、新舊の差別なしに

先年 大正十年
ロンドン
Paris 及び London

優しく御接しになるさうであります。しかも舊い人をいつまでも御忘れにならずに、元の侍女や御學友などが御伺ひ申しますと、大層御喜びになります。私どもにもやはり其の通りで、御誕辰其の他の御祝のをりには御召があり、御機嫌伺に出ますれば、特別に拜謁を許され、御都合のお宜しい時は、御引止めになつて御言葉を賜ふのであります。先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリで御迎へ申し上げました。が屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられますので、覺えず無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだんく、荒んで師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年

學生の多い今日陛下のかやうな御態度は、實に貴い御模範ではありますまいか。

陛下の御盛徳を稱へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無い御方で、現御神としての神々しい御性格を先天的に御具へあそばしていらせられると申し奉るほかはありません。(教育研究)

三 競 漕

久米正雄

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。大學の事務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色

久米正雄
文學者
明治二十四年長野縣
上田生
大學
東京帝國大學

コース

競漕場

Course 航路
水路

文・農

文科と農科

ユニフォーム

制服

Uniform 運動着

文科

今の文學部

臺船

棧橋につないだ方形の船

棧橋から端艇に乗移る便に供する

の大きな旗を立てた、それが晴れがましく見えた。午後になると、晴れたまゝに風が吹いて来て、應援船の旗をはた〜と鳴らした。コースには可なり荒い波が立つた。しかし愈々文農の競漕が始らうとする頃になつたら、珍しい夕風が來た。

選手は皆樺色のユニフォームを着た。それが久野には何だか身が緊つたやうに感ぜられた。土手では觀衆が一種の尊敬と好奇との念を以て、この樺色の服を着た選手たちに道をあけた。文科の端艇が先づ拍手に送られて臺船を離れた。窪田等はいつともよりは緩やかな調子で漕出した。そして三十本ほど試漕をした。やがて審判艇の差出す綱

農科

今の農學部

に繫留した。續いて農科の艇も繫がれた。

艇庫と土手と應援船とから文科あ。農科あ。樺あ。紫い。

などと呼ぶ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて出發點へ向つた。漕手は皆艇の中に寝てゐた。久野は舵の綱をつまぐりながら應援の聲を聞いてゐた。

艇は出發點の赤い浮標に就いた。水路を見渡すと、風は全く風いでゐるのではなかつた。絶えず北東から吹いて來て、艇首を左へ曲げた。久野はそれを直すために、幾度も二番に軽く櫂を入れさせなければならなかつた。艇首を曲げて出發しては、只さへ淺草岸へ向きたがる艇の癖を一層激しくするやうなものだ。若し水路を外れて淺瀬を漕い

淺草岸

向島堤の對岸
隅田川の右岸

だら艇脚のとまるのは明らかである。岸の審判所では「文科の艇は出過ぎたから、櫂を入れるな」と叫ぶ。久野は気が気でなかつた。その内に用意の令が下つた。艇首は又一瞬間の強風に曲げられた。「え、まゝよ、もうなるやうになれ」と久野は目をつぶつた。と同時に、號砲が響き渡つた。久野は、用意と號砲との間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思つた。二つの艇の櫂は同時に水にはいつた。

久野の眼には、敵の艇と自分の艇との前方に白く光つてゐる水路の外、何もなかつた。

久野の艇は、どうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはい

シート
Seat
席

けない。皆あわてたな」と、窪田と久野は同時に思つた。敵艇を見ると、確に一二シートは此方より出てゐるらしい。「ゆつくり」と窪田が叫んだ。久野は更に大きな聲でも一度その言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひだした。この時競漕中に敵艇を野次るので有名であつた農科の舵手が「敵艇を抜くこと約半艇身」と叫ん



競漕のトラス

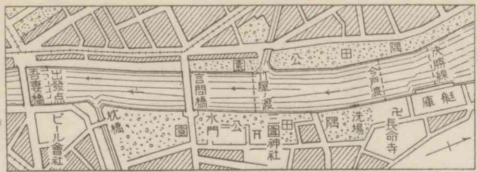
スブラッシュ
水をはねとばす
Splash
こと

だ。久野は言はせもあへず「嘘だぞ」とどなつた。今までだまつてゐた久野は、一度その言葉を言つてしまふと、急に口の緊りが解けるやうな氣がして、恐しく雄辯になつた。その中に農科の三番が大きなスブラッシュをした。水煙が鮮かにばつと騰つた。久野は機を得たと言はんばかりに、「やつたぞ、大きなスブラッシュを」と叫んだ。味方一同これに元氣づいた。敵の艇は久野に野次られて、却つて沈黙してしまつた。

二つの艇はやつと並んで來た。そして、水門前で文科は約半艇身先んじてゐた。それでも、農科の舵手は「向ふはもうへたばつたぞ」などと言つた。久野も「なあに、此方が出てゐ

るぞ」と野次り返した。しかし、心持には少しもそんな言葉戦などする餘裕はなかつた。

水門に來かゝると、久野は「さあ水門だ」と、敵に先んじて叫んだ。如何なる舵手でも言ふにきまつてゐる場所の指示を、機先を制して叫ぶのも、一つの戦術であつた。早く言つた艇が遅く言つた艇より先にその場所に届いた譯だから。後ればせに、農科は水門で特別の力漕を十本やつた。それで兩艇はまた並んだ。後から追ひかけられると、何だかずつと追抜かれるやうな氣がするものだ。久野の艇は、何だかいつもより艇脚が遅いやうであつたが、暫くすると、またじり〜と抜きだした。久野は「この調子で」と叫んだ。農



隅田川競漕コース

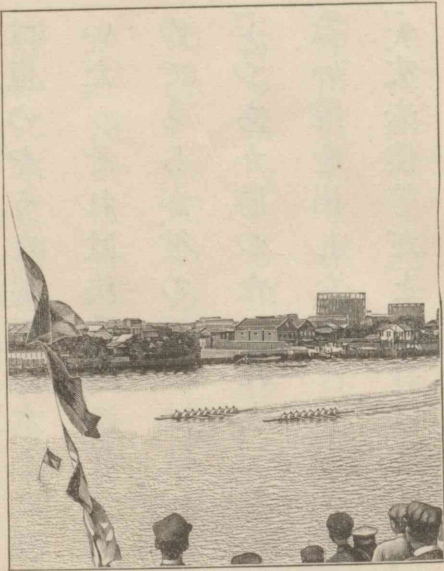
Pitch
調子

Last-heavy
ラスト、ヘヴィ
最後の力漕

科の艇は沈黙してゐた。そして渡場での力漕十本は、もう此方に對して何の効力もなかつた。窪田は半眼でその敵の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げだした。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。しかし此處での半艇身くらゐの差では、敵のラスト、ヘヴィが利けば何の役にも立たない。久野は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ」などと激励した。この「あと一分」といふ練習中に用ひ慣れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくら疲れても漕げる筈なのだ。すると、不思議に艇がよく出だした。文

科の艇は、疲れて來ると各個人の癖が取れて、全體としての調子がよく揃ふ。協力が此の時始めて完全に出來た。そ



決勝線に入らうとする瞬間

して窪田の權につれて、各は機械的に身體を前後に動かした。

農科のラストも實によく出た。しかし、それを見て久野が氣遣つてゐ

る間に、文科の方のヘヴィも非常によく利いた。多年の熟練で、窪田のピッチがぐんぐん上つた。「もう十本」決勝線に入るまでは随分長く感じられた。久野は、ひよつとする

ともう決勝線へはいつてゐるのに、審判の號砲が発火しないのではないかと思つた。その刹那、號砲は轟いた。皆は漕ぐことをやめて、艇内にどつと身を伏せた。この時、久野は嵐のやうな喝采が水上に響き渡つてゐるのを始めて聞いた。それは決勝線に近づく時から鳴りもやまなかつたのであるが、彼の耳にははいらなかつたのだ。どつちが勝つたのだと、二番の早川が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「大丈夫、僕等だ」と久野は答へた。しかし、久野自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして、審判所に掲げられた樺色の旗を見るまでは、安心がならなかつた。

喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戦であつたが爲に、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆までも熱狂せしめたのである。

「窪田君、艇を岸へつけようか」と久野は言つた。

「待ち給へ。もつとゆつくりでいゝよ。こんな事はめつたに無いんだから、ゆつくり勝利の心持を味ははうぢやないか」と窪田は答へた。そして、艇は喝采の渦巻の中で、なほも靜かに水に漂はされてゐた。

その時、久野はふと農科の艇を見た。それは今岸に着けられた處であつた。そして、野次が敗れた選手を艇内から扶け起して、岸へ上らせてゐた。三番の大きな男が二人の野

次の肩にもたれかゝつて、涙を隠しながら運び去られた。彼等はわざととしてゐるのか、眞に動き得なかつたのか、とにかく一人では立てぬまでに疲れ果ててゐた。

たつた半艇身の差が、何といふ感情の相違を作つたことであらう。時間にすれば二分の一秒を出ない時である。空間にすれば四米と出ない處である。而して全體の水路から見て眞に何百分の一に足らぬ間である。この少しばかりの、しかも効果の恐しく大きな差は、そも何處から出たのであらう。一本の櫂毎に三四纏づつの差が出来るといふ豫定が主將の窪田にあつたであらうか。毎日の練習の何分間かの優越が此の差を作つたと、久野自身も信ずること

が出来てあらうか。もし此方の選手の誰かが一本の櫂を流したら、どうだらう。忽ち勝敗の數は顛倒するかも知れない。久野がちよつと舵を入れ損つたら、どうだらう。忽ち艇は追抜かれたかも知れない。眞に危い勝負であつた。「それはともかく、勝つたには違ひないんだ」と、久野は置去られた敵の艇をなほも見ながら考へた。

その間に、應援船が四方から漕寄せた。選手はやつと蘇つたやうに勝利を感じだした。

勝利といふものの齎す感情は、すべてのその中で最も妙な、複雑なものであると久野は思つた。夕日が、今戦のあつた水路を掠めてゐた。久野は再び岸にゐる觀衆及び近く

に漕寄せた應援の人々の顔を珍しげに見廻した。

(學生時代)

小笠原長生
海軍中將
宮中顧問官
子爵
慶應三年(三三)舊唐
津藩主の家に生れた
決死の一隊

四 二つの肉弾

小笠原長生

敵前二十米まで進出した決死の一隊は敵の猛射をあびて、その前進をはぐまれると共に、時は一秒々と迫つた。遂

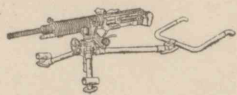
廟江鎮附近



馬田軍曹
第二破壊隊第一班長
工兵軍曹馬田豊喜

に、
「強行破壊」
の命は下り、馬田軍曹の率ゐる第一班は、突撃して鐵條網の破壊を敢行しようとしたが、無念や、全員殆ど斃れて、その目的を達することが出来なかつた。

機關銃



三烈士
第二破壊隊第二班第
一組(長)工兵一等兵
作江伊之助
同北川丞
同江下武二

親愛なる戦友が憎むべき敵弾のため相繼いで悲壯な戦死を遂げ、或は傷つき倒れるのを見て、豫備にあつた第二班の勇士たちは、燃えあがる悲憤の念に、思はず眦を裂いて敵陣を睨んだ。

勝誇つた敵軍は、なほも猛烈に機關銃や小銃を亂射して、その危険と凄惨とはいやましに加はるばかりであつた。今や鐵條網破壊のために、瞬時でも壕を出て進出したならば、再び生還を期し得ないのは勿論、鐵條網まで到達することさへ不可能とされるに至つた。

しかも、歩兵部隊の突撃開始の時期は時々刻々に切迫して来る。やがては下るべき突撃破壊の命を前に、三烈士たち

はいかにして、この猛射のなかを衝いて破壊作業を達成すべきかを考へずにはゐられなかつた。死は易い、されど任を果すのは重い。徒に死んでは不忠になる！

「今に見ろ、今度こそは、完全に破壊して見せるぞ。」

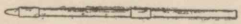
烈士たちは、心のうちでかう叫んだ。

けれども、この場合、その目的の達成は殆ど不可能とさへ思はれるほど險悪極まる状況であつた。

「おい、敵の射撃がかう猛烈では、とても鐵條網へは行きつけないぞ。」

「たとへ行きつめたとしても、破壊筒を差込んでから、點火

破壊筒



などしては居られんぞ。」

「なに構ふものか、火をつけてから、その破壊筒を持つて突撃しよう。そして鐵條網に投げこまう。」

烈士たちの間には、期せずして、かうした最後の決心が定められてゐた。

この方法こそ、工兵としては最後の非常手段で、身を捨ててその目的を貫徹する壯絶凄絶の破壊方法であつた。

しかし、三烈士の心の中には、それだけで十分に破壊の目的が達せられるかどうかについて、大いなる不安があつた。

「投げつけただけでは安心が出来ないぞ。」

「よしつ、それなら抱いたまゝ、鐵條網の中へ飛込めば、大丈



江下武二



作江伊之助



北川丞

夫だらう。」

「さうだ破壊筒と一緒に、おれたちも爆發させれば間違ない。」

「よし、きつとうまくいくぞ。」

三烈士は、じつと手を握り合つて、必死の約束を取りかはした。

まことにこの場合、爆彈と共に三人が飛込まねば、歩兵突撃路は絶対に開かれないのだ。何といふ健氣な覺悟であらう。自分の肉體を爆裂させて鐵條網を破壊しようとするのである。

これぞ、必ず死ぬが、必ず成功するといふ悲壯極まる決心なのだ。鬼神もその壯烈に泣かう！

時は來た、重大任務の時は來た。

「最後の組だつ。」

東島隊長の悲痛な叫。

「それつ。」

とばかり、この期を待ちに待つた三烈士は、欣然としてすぐに突撃破壊の準備にかゝつた。

生死を超越した三烈士は、晴れやかに歡聲をさへ揚げつゝ、四米の青竹で作つた破壊筒に、次の命令を待つまでもなく、

東島隊長
第二破壊隊長工兵少尉
東島時松

すばやく點火した。

「前へつ」

の號令一下、三烈士は、北川・江下・作江の順序で、點火された破壊筒を引擔ぎ、堰を破る奔流の如く、はた弦を離れた矢の如く、無二無三に飛出した。

身も心も一つになつた三つの肉弾は、何の躊躇もあらばこそ、戦友の死骸を飛越え、踏越え、鐵條網目がけて奮進した。この際、一つの破壊筒を三人で持つて行つたのは、その目方が重いためといふよりも、よしや途中で一人が斃れても、残りの二人で鐵條網へ踏込み得べく、更に又一人が斃れても、最後の一人で投込むことができるといふ、最も安全な方法

だからであつた。三つの肉弾は、北川一等兵を先頭に一つの破壊筒となつて、驀進また驀進、雨と注ぐ敵の猛射の中を猛虎の如く突進した。が、敵前に至り、北川一等兵は小銃弾にやられて、ばつたり倒れ、二勇士も同時につまづいた。「しまつた」と思つた刹那、三人は忽ち起上り、今しも爆裂しようとする破壊筒を抱き、まつしくらに鐵條網に突進した。



廟行鎮の戦跡

「あつ。」
と思はず叫ぶ途端。

「どかあん……。」

轟然たる大爆音が、天地をゆるがして響き渡つた。

同時に、大きな肉塊が、火焰と共に八・九米天空に舞上つたかと思ふ間もなく落ちて來た。

三勇士の肉弾が爆薬と共に微塵に碎けて戦場の花と散つたのである。

悲壯極まる三烈士のこの爆死の光景に怖れをなしたか近くの敵軍は、わあつと悲鳴をあげて逃出した。

かくまで尊き犠牲の下に、突撃路の一條は遂に完全に開か

れたのであつた。(忠烈爆弾三勇士)

五 比叡の鳥

高濱 虚子

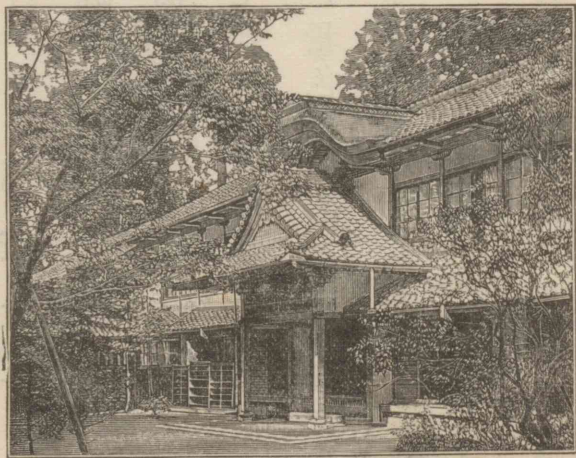
高濱虚子
俳人
名は清
明治七年愛媛縣松山
湖水生
比叡湖
部屋
比叡山延曆寺東塔の
宿院の室

寢床を出て、楊枝を使ひながら湖水の見える部屋にいつて見る。朝日が一杯にはいつてゐる。

湖水と思はれる邊は雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつてゐるので、我が眼よりやゝ高く、やゝ低く、數知れぬ杉の梢が、さながら銚子のやうに突つたつてゐる。左手には北谷の向ふに當る杜が、鋸の齒のやうな杉を背に並べて湖の方に流れてゐる。空氣がいやが上に清いので、近景の杉

の梢も、遠景の杉の杜も、共に新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄い霞が流れてゐる。

非常に静かだ。自分の呼吸の外、うき世の物音は何も聞えぬ。たゞこの天地を我が物顔に啼囀つてゐるのは小鳥だ。何といふかはいゝ、聲の小鳥があるものであらう。名の分らぬのが残念だ。その杉の梢で一羽が啼いてゐる。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又遙か向ふの谷深く他の一

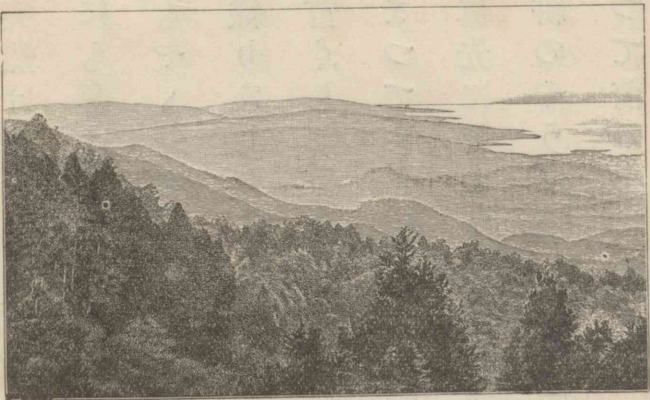


比叡山延曆寺宿院

羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲が、ど

こかで聞えるやうだ。

この小鳥の合奏を破るやうな別な聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥程優しい聲ではないが、又りゝしいところがあつて、その聲の空山に響く趣が何とも言へぬ。これも名は分らぬ。それが一羽ではない、三羽・四羽と段々聲の主が殖えて来る。前の小鳥が縦糸なら、この小鳥は横糸だ。互に錯綜して、よく諧



山鳥



調を保つところが面白い。突然けんくとけたましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやゝ急調だ。山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織りなした美しい絹をたゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。暫くして、その聲は谷の底の底、峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、あとはもとの静かさになる。

眞先にその静かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれる緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、また縦糸を織つて前の小鳥が啼く。横糸を織つて次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦糸が啼く。横糸が啼く。この絹をまた山鳥が

鰐口



啄木鳥



島崎藤村

詩人
文學者
名は春樹
明治五年長野縣木曾生

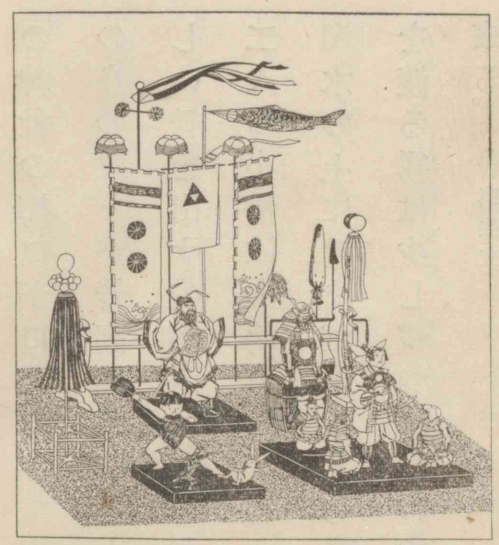
破るのかと思ひながら待設けてゐると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聞く蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけてつぶやくのかと思はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、獨り低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は啄木鳥だらうといった。二人の小僧は山鳩だらうといった。湖水の上にはまだ漠々とした白雲が漂つてゐる。杉の梢を渡る霧は少しづつ薄らいで、だんくと谷が深く見えて来る。(新寫生文)

六 菖蒲の節供

島崎藤村

花祭
四月八日釋迦降誕の
日花をたむける祭事
クリスマス
十二月二十五日
Christmas
の
基督降誕祭

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教的の祭日ではな



五月の節供の飾

いまでも、一年に二度の節供の祝が、たゞ幼い者の爲にあるのは嬉しい。——女の兒の爲には三月の桃の節供、男の兒の爲には五月の菖蒲の節供のあるのは嬉しい。

あの三月の節供に取出されて、今に合唱でもはじめさうな雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の

鐘馗
支那で疫鬼を驅るといふ神

節供を祝ふためにあるものは、鍾馗や、鬼や、金時や、桃太郎などの行列である。五月の空に高く翻る鯉幟は、恰も子供の國をそこに打建てたかのやうにも見える。狭苦しい町の中にあつても、あちこち、屋根の上に鯉幟を望むのは楽しい。鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を樂しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供の心に返すものは、あのはたはたと風に鳴る鯉幟の音である。

その他、五月の節供を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒に葺く菖蒲までがお伽噺の情調を誘ふのも、懐かしい。五月の節供を迎へるころは何と言つても季節の感じが深

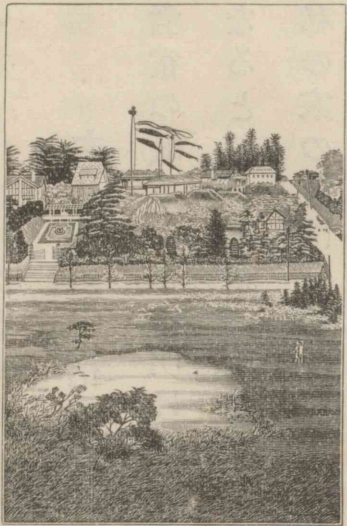
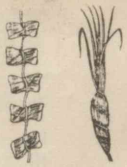
満天星



い。桃や櫻は過去り、椿や木蓮にも遅く、山吹や藤や満天星などの花が香氣を放つ五月の初は、一年の中の最も楽しい季節の一つである。遠い山々へはまだ雪の来る日があつて、雨でも降れば、**裕**では寒いこともあるが、私たちの周囲は、もはや若葉の世界である。この好い時候に、楽しい菖蒲の節供がやつて来る。

桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形も好い。爽かてみづくし葉の色も好ましい。あれを軒に葺くといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯がたつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私た

粽



ちの身をも心をも温めてくれるのも嬉しい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中を搔分けて湯槽に浸るのも楽しみだし、あの葉が私たちの肌などへべたつとついた時の心持もわるくない。

五
月
の
香
は
幼
い
日
の
香
で
あ
る。
粽
ば
か
り
は
鄙
び
た
と
こ
ろ
で
作
ら
れ
る
も
の
ほ
ど
好
い。
あ
の
細
長
い
笹
の
葉

の巻附けてあるのを解いて、青い色に蒸された香を嗅いだ子供の頃の心持は、今もなほ忘れられない。粽の外に、柏餅、赤飯などと敷へて来ると、五月の節供を祝ふもので、何かな

しに懐かしい思を誘はないものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。

(藤村讀本)

服部純雄

教育家

明治二十五年岡山市生

七 雑草の花

服部純雄

雲雀の歌聲に夜が明けて、雲雀の歌聲に日が暮れるころになると、散歩は私の生命となつてくる。私の家の前は一面の麥畑、うしろは、すぐ竹林につゞく雑木の小高い山である。その左側の山裾に、上中下段と三つの貯水池がある。私の散歩は、いつもきまつてこのあたりで終を告げるのである。そして、池のほとりの芳しい雑草の

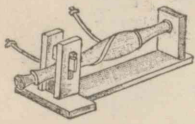
上に、ごろりと横たはるのである。

澄みきつた、ゆたかな初夏の天空を見つめてみると、燕が身輕に滑走して、すうと斜に飛ぶ。やゝ暫くして蜻蛉が悠然と過ぎてゆく。更に暫くして、虻が眼の前一尺のところには、ぶうんと羽音を響かせる。

からだを少し斜にすると、旭川の銀波に筏が流れて、滑るが如く向ふの山かげへと隠れてゆく。

土手下のうれた麥畑からは、數多の雲雀が舞ひあがる。ちいちく、ちいちくと、まるで箱根細工に用ひる轆轤のやうな音をきしらせて、小さな黒點となるまで舞ひあがる。

池の中のさびた藻草のかげには、大蛙小蛙が咽喉袋をふく



轆轤

神奈川縣箱根の温泉地に産する細工物

箱根細工

岡山市を貫いて兒島

又西大川

旭川

その聲で
一茶の句

一茶

俳人

本名小林彌太郎

信濃の人

文政十年(二四七)歿

年六十五

花茨



霧島躑躅



らませ、だみ聲はりあげて野人の唄を合唱する。

その聲で一つ踊れよ鳴く蛙

一茶の飄逸を想起する。

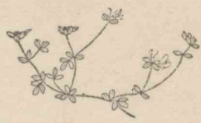
黒ずんだ青葉の森では鶯が啼く、春蟬が啼く。池の汀には、芳しい花茨が雪と亂れる。山の崖、林の奥、段々畑の畔近くまで、霧島躑躅が、色とりどりに野を飾る。

何といふ大自然の生命、その生命にかゝやく美しさであらう！

しかし、私に最も興味を起させ、最も親しみを感じしめるものは、名も知れぬ可憐な雑草の花たちだ。

そら、私のねころんでゐる下にも咲く。

みやこぐさ



はこぐさ



うしほぐさ



立浪草



ピン

植物の知識に乏しい私にも、それとわかるは、黄色い小花をつけるみやこぐさと、きんばうげ、女郎花に似たはこぐさ。薄紫の小花むらがるうつぼぐさ、名にふさはしい立浪草、幼き夢のつばなの花。

しかし、つくつく見まはすと、細い、かぼそい小草まで、それぞれに小さな花をつけてゐる。

「まあ、こんな草までが、」

と、妻が、ピンのあたまほどの小さい水浅黄の小花を見せてくれた。

よくよく見ると、造化の奇蹟は、こゝにも宿る。

何といふ精巧、何といふ端麗なことであるよ。紫・白・黄・淡紅・
麩脂えんじ名も知れぬ様々の雑草が、それらの小花を着けてあ
るのだ。

よく見れば
芭蕉の句

よく見れば薺なづな花咲く垣根かな (雑草の花)



相馬御風
文學者
名は昌治
明治十六年新潟縣糸
魚川町生

八 苗

相馬御風

田植の季節が来た。

今年はずつかく苗の伸びようとする盛りに、二月頃のやう
な底冷のする寒さがやつて来て、半月あまりも、ひつきりな
しに雨が降りつゞいたために、苗の成長の悪いことといつ
たら、てんでお話にならないほどである。

「かう苗がわるくては、田植をする張合がないな。」

こんな歎聲が田圃の到るところで聞かれた。みづから耕
すべき田を持つてゐない私たちまでも、かうした力ない百
姓の言葉を聞くと、たまらない不安を感じないではあられ
ない。百姓にとつて一年中で最も楽しい仕事のひとつとな
つてゐる田植も、心持からか、今年は妙にもものうさうに見え
る。

「昔から巳歳には饑饉が多いといふから、今年もそんなこ
とになるのではないだらうか。」

日頃はさうした古い言ひつたへなどを眼中に置いてゐな
い若い男たちまでが、時にはそんなことを眞顔で話してゐ

た。

若い者たちまでがそんな風だから、老人仲間では、さうした迷信的不安がどんなに烈しいかわからない。——私はそんなことを思つて、或日友人の家に使はれてゐる作男の爺さんにその事を尋ねた。その爺さんは日頃からひどく私の好きな人の一人なので、若しその爺さんがそんな事から氣を腐らせてもしてゐるなら、何とかして慰めて、せいと元氣をつけてやりたいと思つたからであつた。ところが、私のさうした幼い豫想は全くはづれて、反對に爺さんの口から、思ひがけない元氣のよい言葉を聞いた。

「そのやうなことを言つて氣に病む者もありますけれど、

私はさうは思ひませんね。それといふのは、私が覺えてから、苗のひどくわるかつた年に、さうひどい不作のことが無かつたからでね。なに大丈夫ですよ。苗がわるいのが氣になつたら、そのつもりで、植ゑてから後を、平年の二倍も三倍も精出して育てればよいのです。」

苗のわるい年には、その割に作のわるいものではない。——苗のわるいのが氣になつたら、植ゑつけてから後で、平年の二倍も三倍も努力を以て稲を育ててやるがよい。——かうした簡単な言葉のうちに、何といふ底力のある安心と自信とが包まれてゐることだらうと、私はつくづく感心しないではゐられなかつた。

「くよくく物を案じてゐる暇があつたら、そのかはりに努めよ。心配に力を費すよりは、よりよい未來のために力を費すがよい。」

私はこのやうな生活態度を羨ましくも思ひ、貴くも思ひ、懐かしくも思つた。私たちはこの爺さんに學ぶべき多くのものがある筈である。 (田園春秋)

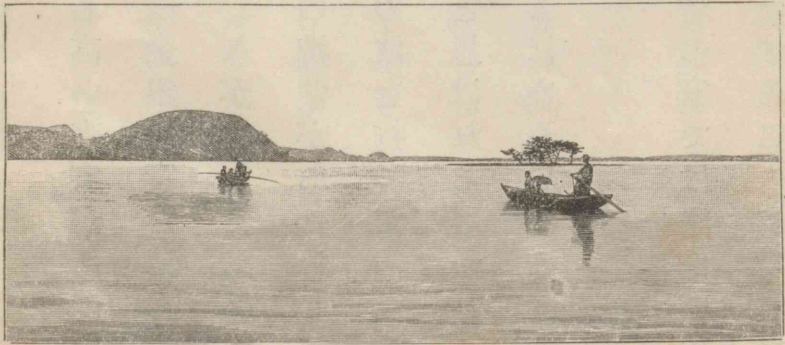
九 湖山長者

五十嵐 力

山陰線の鳥取驛から西の方へ十二軒あまり行くと鏡のやうな湖水がある。湖山池といつて、周回が十六軒近くもあらう。西南の方には丘陵や小山が波のやうに起伏して、春

五十嵐力
國文學者
早稻田大學教授
文學博士
明治七年山形縣米澤生

は爛漫たる紅白の花に彩られ、夏は滴る樹々の翠に潤され、秋は燃立つ千入の紅葉を以て飾られる。東北の方には田畑が廣々と連なり、砂の丘を隔て、遙かに漫々たる碧の海を望むことが出来る。かやうに山と海とのえならぬ眺を兼ねた上に、湖の面には時々蘆荻の生ひしげつた間に鷺鷥の閑眠を貪るのが見え、又仙人めいた舟子の網を擧げて細鱗を捕るのが見える。景色の雅なこと、誠に一幅の名畫を展



湖 山 池

げたやうな趣がある。

今は昔、このあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつた。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで山をなしてゐた。着るには綾錦の美しきがあり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして所有の田地は、見渡すかぎり廣々と稲の波を打つてゐた。たとへば天下の富をこゝに集めたかと思はれるばかりで、世の中の事、何一つ此の長者の思ふまゝにならぬものはなかつた。

或年夏の田植時の事である。湖山長者の家では、季節中の最上の吉日を卜して、その廣田に田植をすることになつた。

長者の家に使はるゝ者は勿論近郷近在の者どもまで、今日こそ長者の田植だといふので、老幼男女數をつくして身支度かひとしく、田圃をさして出かけて行く。長者は高殿の欄干にもたれて、目も及ばぬ田地を遙かに見渡しつゝ、己が限りなき富に、思はず得意の微笑を漏らしてゐた。さる程に、仕事は面白いやうに運んで、早苗を取る男女の手の動く度ごとに、濕つた黒い土の色が片端から青くく變つて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕暮近くなつた。仕事はめきくと運んだが、何といつても長者が廣い田地のことであるから、植ゑるに果てしなく、まだ數段残つてゐる中に、日ははや西の山に入らうとした。

長者はこれを見て、あゝ、今少し日が高くば、全體めでたく濟まうものを！」と、しばし深き思に沈んだが、つと立つて、黄金の扇を持來り、さつと開いて、今しも沈まうとする夕日を三度までさしまねいた。

見る間に、山の端にかゝつた夕日は三間ばかり昇つて來た。長者の喜と心傲りとは、どんなであつたらう。田に立つてゐた村人たちは、天道様を左右する長者の威力を見ていかに驚いたであらう。かくして、これまでと思つた田植も思ふまゝに捗つて、その日は無事に暮れた。

田植に出た人々は終日の働に非常にくたびれたが、長者がねぎらひの酒食に歡をつくして、いづれも快く枕に就いた。

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、短い夜はやがて明けた。朝の床を起出でて背戸の流に落合つた村人等は、申し合はせたやうに先づ昨日の田植の苦しかつた事を話し、次には入日を招き返した長者の恐しい力をたゞへた。それから昨日幾千人の人が一日に植ゑあげた田の有様を見ようと、して出かけたが、誰一人腰をぬかすばかりに驚かぬものになかつた。

驚くのに無理はない。

見よ！さしにも廣かつた長者の田地は跡かたもなくなつて、漫々たる湖が、朝の嵐に白い波を立ててゐるではないか。數千人で一日植ゑつけた早苗が一本も見えないで、渚には

群立つ蘆が波に洗はれ、風にそよいでゐるではないか。長者の家は、この時から一日々々と衰へた。そして終に、この広い田と同じやうに、全く亡びてしまつた。

(趣味の傳説)

柳澤淇園

大和國郡山藩の老臣
名は里恭
文武の才に富み兼ね
て書畫をよくした
寶曆八年(西一千七百三十八)卒
年五十三

一〇 寓言

かんにん

柳澤 淇園

或人文盲なるものを意見して、「世の交は他の事はいらす、ただ堪忍の二字をよく守るべし」といふ。文盲の人首を傾け、

「かんにんとは四字にて侍らずや」と指にて數へ、「御許にはおぼし違へなるべし。かんにんの四字にて侍り」といふ。意見したる人、「愚昧の人かな。堪忍とは、たへしのぶと書き、て二字なり」といへば、また首傾け、「たへしのぶならば、又一字ふえたり。五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり」といふ。かの意見したる人大いに憤りて、「汝が如き愚昧のものは實



淇園主人畫

柳澤 淇園 筆

に諭しがたし。人に似て蟲同様なり。己がまゝにすべし。といひければ、文盲の人笑ひて、「何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても、少しも腹立ち侍らざるなり。」とて笑ひたりきとぞ。(雲萍雜誌)

室鳩巢

江戸時代の儒者

名は直清

享保十九年(三三〇)卒

年七十七

列子

支那周代の哲學者

名は禦寇

愚公の山

室鳩巢

諸君列子が見たまへりや。「愚公といふ人ありけるが、家居近く山のあるを厭ひて、よそへ移さんとて、日々に子供引具し、手づから耒耜を執りて一簣づつ毀ち取りけるを、智叟といふ人これを見て、「かく大いなる山を僅かなる人の力にて毀たばとて毀ち盡くさるべきか。」とその愚かさを笑ひ

ければ、愚公聞きて、「わが代より毀ち始めて、わが子の代にも繼ぎて毀ち、わが孫の代にも、亦その子の代にも繼ぎて毀ちなば、終に移されざることやはあるべき。」といへば、愈々笑ひけり。となん記し置かれける。

凡そ天下の事、愚公が如くならば、遅くとも一たびは成就すべし。然るに世に智ありと稱する程の人は、大方智叟が心にて、愚公が山を移す様の事を聞きては、その愚を笑ふ程に、何事もその功を成就せぬなるべし。されば、世のいはゆる愚は反りて智なり、世のいはゆる智は反りて愚なり。それゆゑに、禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ。(駿臺雜誌)

八波則吉

國文學者
第五高等學校教授
明治九年福岡縣生

一一 漸進

八波則吉

「漸」の一字、これ私が平素最も愛する文字です。「漸は、やゝ、やゝやゝ、やうく、やうやく」などと訓じまして、次第々々の義です。急の反對です。一步々々の意味です。一足飛ではなくて、一足づつの意味です。漸進、漸進。これ私が平素最も愛する主義です。

戊申詔書の中に「自彊息マサルヘシ」といふおことばがあります。それは周易の「天行ハ健、君子ハ以テ自ラ彊メテ息マズ」と同義だと承つてゐます。即ち日月星辰の運行は幾萬年の往古から幾億歳の未來まで、自彊不息です。しかも一定の速度を以て一定の軌道を漸進してゐるのです。御覽

戊申詔書
明治四十一年戊申の
歲十月十三日明治天
皇の下し賜うた勤儉
獎勵の御詔

なさい、太陽は旦に東天に出て夕に西山に没すること、昨日も今日も同様です。千古不易です。試に日向に棒を立てて日影の推移を熟視すると、少しも動いてゐる様には見えませんが、暫時油断してゐる間に、驚くばかり移つてゐます。東北地方で、農夫が夏時田の畔や草原に寝てゐるが、竿に蓑笠を吊して枕元に立てながら、身はその陰を離れる尺餘の炎天下に熟睡してゐるのを往々見受けると、或旅行記に記してあります。これよく天行の健を示すと同時に、君子ではない者の自彊不息實行難を物語つてゐるではありませんか。

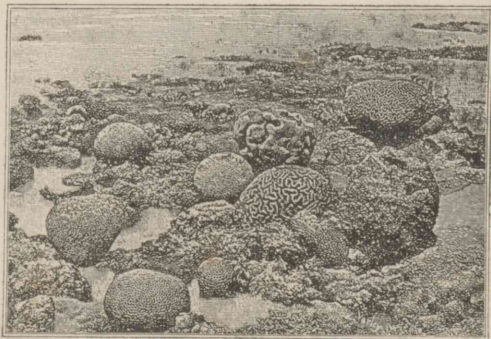
南洋にある珊瑚礁は珊瑚蟲と稱する微細な蟲の分泌する

蟻の塔



石灰質の堆積ださうです。蟻の塔や蜜蜂の蜜などを見る毎に、私は自彊息まない漸進主義の効果の大きいのに驚かないではゐられません。

昔愚公が山を移したといふ話が列子といふ書に出てゐて、駿臺雑話にも引いてあります。又鐵の杵を磨いて針を造る者を見て學に志した人の話は、よく人口に膾炙してゐます。何れも根氣よく辛抱すべき事を諭した自彊不息の實例で、取りも直さず漸進主義の効果を語つてゐるのであります。



珊瑚礁

學に志した人
唐の詩人李白

明治天皇の御製の中の

いちはやく進まむよりも怠るなまなびの道に立てるわらはべ

とる棹の心長くも漕ぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

大空にそびえて見ゆる高嶺にもものぼればのぼる道はありけり

など、何れも漸進、即ち息まない自彊の徳を教へ給うたものと拜察します。古今集の序に、

「遠き處も出でたつ足もとより始りて年月をわたり、高き山も麓の塵ひぢよりなりて天雲たなびくまでおひのぼ

古今集

二十卷
勅撰集の第一
延喜五年紀貫之等が
勅を奉じて撰進した
もの

れる如くに……」

とあるのも、古歌に

怠らず行かば千里のはても見む牛のあゆみのよし

おそくとも

とあるのも、またこの漸進主義を説明し鼓吹したものと見れば見られます。(よくぞ男に)

一二 リンカーンの少年時代

内ヶ崎作三郎

リンカーンが十二三歳の時に用ひた習字本の初の頁に、如何にも子供らしい可憐な筆蹟で、こんなことが書きつけて

リンカーン

北米合衆國第
十六代の大統

領

名はアブラハム

ム

南北戦争に勝

つて奴隷解放

を斷行した偉

人

Abraham Lincoln

(1809—1865)

内ヶ崎作三郎

早稻田大學教授

衆議院議員

明治十年宮城縣生

あつた。

アブラハム、リンカーンは、

心も行も共に

善良なれ、

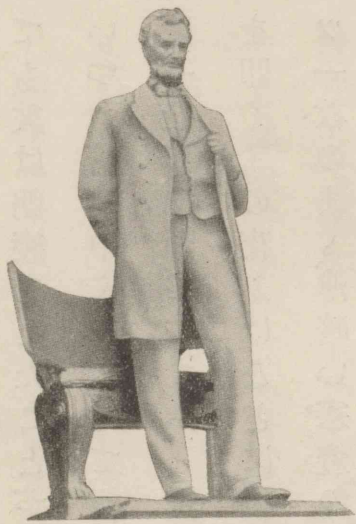
神は常に知り給ふ故。

彼は毎日未明に起出でて、鋏や斧を背負つては、露けき田舎路を野らに急ぐのであつた。彼は路すがら、前夜母親の焼いてくれた玉蜀黍をかじりながら、片手に携へた本に讀みふけた。近所の主婦や若者たちは、いつも朝早く彼の姿を見かけては、遊びざかりの年ごろに寸暇を惜しんで働いて、貧しい父母を助ける彼のいぢらしい幼心につくづくど

ズボン
の証
Jupon

感じ入つたものであつた。
「やあ、アブさん、いつもお早いね。」
と言葉をかけられても、本に心をとられてゐるリンカーンは一向氣がつかない。彼は片時も本を手放したことはなく、懐には本を入れ、ズボンのかくしには黒麴麩を入れて野らに出る。正午になれば、樹陰に憩ひ、本を讀みながら辨當をたべる。夕暮星を戴いて家に歸ると、親子並んで食卓に就くのであるが、彼は母の與へるものは、何でもおいしさうにたべた。彼は、姉と今日一日のつらかつた、樂しかつた野ら仕事の話をする。兩親は子供等の無邪氣な笑聲を聞きながら、一日の苦勞も忘れるのであつた。

バター
牛乳の脂肪を固
めたもの
Butter
プディング
肉や果物にパン
の皮をかけて焼
いた菓子
Pudding
シャツ
Shirt



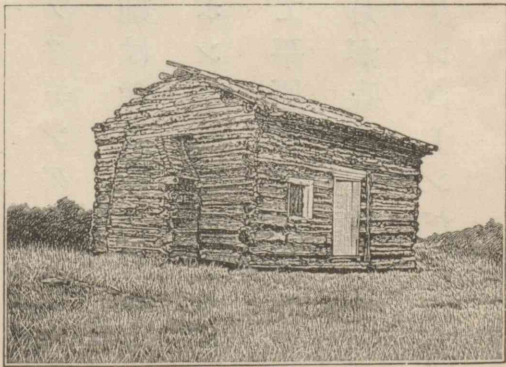
リンカーンの銅像

食事を済ますと、リンカーンは熊の皮を敷いて爐邊により、赫々と燃える薪の焰をたよりに、熱心に本に讀みふける。父は背戸で乾草を束ねる、馬の秣を拵へる。母は臺所でバターや、プディングをこしらへる。姉は父親や弟のシャツやズボンの綻などを縫ふ。かくて平原の夜は靜かに更けて、月が森の彼方に沈む頃には、一家は臥床に入るのであるが、リンカーンだけは讀書に夢中である。
「アブや、今夜はもう遅いからおやすみ。あまり勉強し過

ぎてからだをこはさぬやうに氣をおつけ。」

母に心配されても、リンカーンは生返事。しかし夜が如何に遅くなつても、彼は朝寢をしたことがない。いつも暗い中に起出でて、朝食までに一仕事やつてしまふ。雲が軒端を叩く秋の夜ふけなどに、彼がシャツ一枚のまゝ、薄暗い寒燈の下で勉強してゐると、母は、

「アブや、夜風は寒いから、薄着をして風邪をお引きでない。」と戒める。父は學問がないから、教育の効能はわからない。



リンカーンの生家

「百姓の子には學問はいらぬだらう。働いて小遣錢でも貯へるがよい。」といつてゐた位であるから、リンカーンが寸暇をぬすんで讀書をしてゐる時でも、用事があればさつさと呼出して使ふ。しかし孝行者のリンカーンは、どんなことでも父の言ひつけには決して背いたためしがない。ところが、母はどんなに貧しくて生活に追はれる忙しいなかにも、何とかして子供らに學問だけはさせたいと思ひ、成るべく用事を言ひつけず、日夜我が身を忘れて立働き、リンカーン姉弟をとともかくも近所の小學校に通はせた。家の貧しさといつたら、一本の蠟燭も容易に買ふことの出来ない程であつたが、母は讀書の爲とあれば、少しも惜しまずにこれ

を用ひさせた。近所の人々も彼の勤勉なのに感心して、時紙や鉛筆などを買つて来てくれた。

クロイフォード
Crawford
ワイームス
Weems
ワシントン傳

Life of George Washington

北米合衆國第一
代の大統領ワシ
ントンの一代記

リンカーンの住んでゐた地方は移住地の中でも最も邊鄙な處で、書物を手に入れることは容易でなかつた。随つて、本を持つてゐる人があると、彼は十數哩をも遠しとせず、その人を訪ねて借りて來た。彼がクロイフォードから借りて來た本のうちにワイームスのワシントン傳があつた。彼は或夜この本を寢床に持込んで、これに読みふけつてゐたが、蠟燭が燃えきつたので、あとは夜が明けてから讀まうと思つて、本をば丸太の壁に挟んだまゝ、寢に就いた。翌朝起きて本を取上げて見ると、こは如何に、大切な借物の本が

べつたりと濡れてゐる。彼はしばしは茫然自失したが、今更仕方がない。全く夜半の驟雨が丸太の隙間から吹きこんだのであつた。彼は早速日に乾かして、直にクロイフォードのもとに持つて行つて、この由を陳べてあやまつた。彼はこの損傷した本を辨償する資力がなかつたので、三日間クロイフォードの畑で玉蜀黍を取入れたり、秣を切つたりして、眞心こめて働いた。クロイフォードもその實直な心懸に感じて、雨に濡れたワシントン傳を彼に與へた。自分のかねて心に懸けてゐた本を得た彼の喜は、そも如何ばかりであつたらう。破窓の下、一穗の寒燈を便りに、これを繕いて建國の偉勳に胸を躍らせた彼が當年の面影は、正に

トレントン
米國東海岸の都
市
ニューヨークの
西南八十八軒に
在る

ヘッセ
獨逸西南部の一
地方の名
米國獨立戦争の
當時英本國は此
の地方の獨兵を
備うて獨立軍を
攻撃した

眼の前に見るやうである。
彼は後年大統領の印綬を帯びてワシントンに赴く途上、ト
レントンの州會堂に於て述べて曰く、
予が少年時代に最初に讀んだ本は、ウィームスのワシン
トン傳であつた。當時予は我が國の正義と自由との爲
に、我等の祖先が肉を削り血を啜つて戦つた幾多の慘劇
を一讀してはるかに建國草創の艱難をしのび、感慨無量
であつた。殊に予の幼い心にしみこんで終生忘れ得ざ
る印象を與へたのは、當地トレントンに於て頑強なるヘ
ッセの軍隊と交へた激戦を叙した一條であつた。凡そ
少年時代に心にしみ渡つた印象は永く消えうせぬもの

イソップ物語
動物を主とした寓話
集の祖
ギリシャのイソップ
の作だといふ
我が國にも早く豊臣
時代から行はれた
フランクリン
Benjamin Franklin
(1706—1790)
北米合衆國の
政治家
學者

である。當時子供心にも、かゝる悲惨なる戦争を敢へて
したのは、何か普通以上に重大なる理由がなければなら
ぬと思つた。我等の祖先が慘澹たる獨立戦争を敢へて
した根本の理由は我が國民の永く忘るゝ能はざる所で
ある。我が國民の協力と人道と自由とは、常に獨立宣言
の精神に一致せねばならぬ。
其の後リンカーンはイソップ物語や、フランクリン自叙傳
等を手に入れた。彼はその後もたび／＼クロイフォード
に雇はれて、丸太の小屋に漆喰を塗つたりした。夜は自分
の部屋と定められた物置で、鋤や板片に、木炭や赭石で手習
もすれば、算術も學んだ。クロイフォードが多少の本を所

ジョン、ブレッケン
リッジ

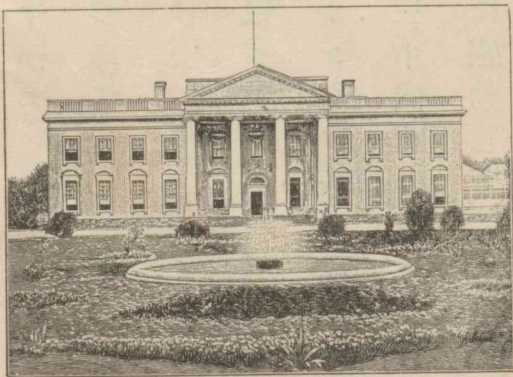
John Breckenridge

有してゐたので、それを熱心にあさつて讀んだ。クロイフ
オード夫人の話に依ると、「アブラハムはたゞに賢い兒であ
つたばかりでなく、氣立のやさしい親切者であつたことは、
よくその姉と似てゐた。アブラハムの日給は二十五セン
トであつたが、彼は少しでも時間におくれる様なことがあ
ると、賃錢を受けようとしなかつた」と。これによつて見る
と、クロイフオードはリンカーンがちよつと仕事の時間
におくれでもすると、彼の僅かな賃錢をどしどし差引いたも
のらしい。

當年この地方に、ジョン、ブレッケンリッジとて、一流の辯護
士がゐて、刑事問題にかけては評判がよかつた。彼が法廷

ワーウィック
Booneville
Warwick
ブーンヴァイル

で雄辯を揮ふ時には、リンカーンは必ず傍聴に出かけた。
彼は早く仕事を仕上げて、十七哩も隔つてゐるワーウィッ
ク州の裁判所のあるブーンヴァイル
まで行つて、夜仕事をする時間まで
には必ず家に歸つた。彼はこれを
何日となく續けたが、終にブレッケ
ンリッジの熱辯に感動して、自分も
辯護士にならうと志した。そして
家に歸ると、裁判の眞似をして、熱心
に辯論を稽古した。かくして彼は遂にこの辯護士に知ら
れるやうになつた。



リンカーン時代の白聖館

ホワイトハウス
White House
米國大統領の公
舎

後年彼が大統領となつた時、ある日、人品賤しからぬ老紳士が白堊館を訪れて、

「大統領閣下、閣下は私を御存じですか。」

とたづねた。彼は暫く老紳士を見つめてゐたが、直に懐かしい微笑を浮べて答へた。

「はい私は記憶してゐます。貴下はジョン・ブレッケンリツヂ君でせう。私は子供の時ブーンヴィルの裁判所で、貴下の辯論がある度に、毎日往復三十四哩の道を歩いて聴きに行きました。貴下の辯論に感動して、私は始めて辯護士にならうと決心したのであります。」

少年アブは友だちから變りものと見られた。それは彼の

シェクスピア
William
Shakespeare
(1564—1616)
英國の大詩
人
大戯曲家

本を愛する念が尋常でなかつたからだ。彼は常に「本を貸してくれる人ほど有難いものはない」と口癖のやうに言つてゐた。彼が容易に本を求めることが出来ない貧しい境遇にあつたことは、不幸のやうではあるが、よく考へると寧ろ幸福であつたかも知れない。彼が母と學校とより教へられた本は僅かであつた。しかし彼はそれを十分に咀嚼して眞に自分の血となし肉となしたから、實際上得た知識は莫大であつた。かくして彼は忍耐・勤勉・正直の精神を鍛錬した。本を讀んでも應用が利かず、常識もなく、人格もない人間とは、彼は全く違つてゐた。「學識は或は書物によりて得られよう、しかし叡智は得られない」といつたシェクス

ピヤの言葉は、正に彼が如き人格者に當てはまるのである。

(リンカーン時代)

一三 惜陰

陶潜

盛年ハ重ネテ來ラズ

陶

潜

晉の高士
號は淵明
元嘉四年(皇紀二〇七)
歿
年六十三

盛年ハ重ネテ來ラズ。

一日ハ再ビ晨ナリ難シ。

時ニ及ビテ當ニ勉勵スベシ。

歲月ハ人ヲ待タズ。

朱熹

宋の大儒
號は晦庵
慶元六年(皇紀一八五)
歿
年七十一

少年ハ老イ易シ

朱

熹

少年ハ老イ易ク、學ハ成リ難シ。

一寸ノ光陰輕ンズベカラズ。

未ダ覺メズ池塘春草ノ夢。

階前ノ梧葉已ニ秋聲。

一四 スポーツ美談

戰の幕は切つて落されました。こゝニューヨークを距る三十二軒、理想的運動場として有名なフォレスト、ヒルの清らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな氣分が漂つてゐます。米國の老幼男女は勿論、世界各國のファンは、ひしとばかりにグラウンドのまはりにつめかけて、この展開された場面に、兩選手の出場を

スポーツ

Sport 競技

戰

大正十年九月二日に
行はれた世界の庭球
デヴィスカップ戰
ニューヨーク

New York
米國東部の大都會

フォレスト、ヒル

Forest Hill

グラウンド

Ground

ファン

Fan 運動競技の熱狂的
見物人

チルデン

Tilden

清水君

名は善造
三井物産會社員
群馬縣箕輪町生

テニスコート

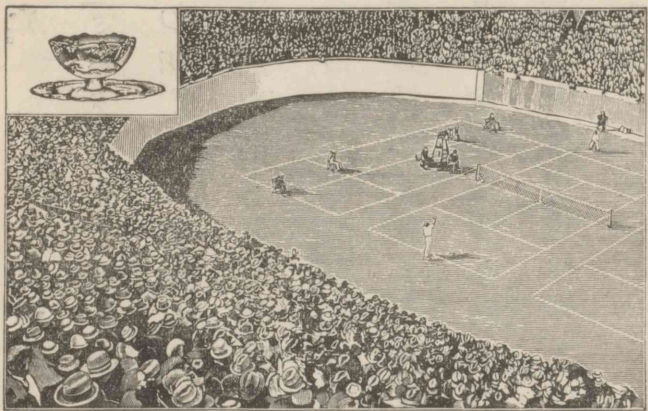
Tennis-court

庭球場

待構へてゐました。チルデン君の上に幸あれかしと祈る人の心と、清水君の上にと祈る人の心とが、平和の光の中に交錯してゐました。

この光の中に、この無聲の應援の中に、凜とした決意と慘澹たる苦心とを想はせつゝ、微笑を浮べて兩選手はテニスコートに現れました。身長百六十五糎の清水君が百八十八糎のチルデン君に向ふのですから、まるで子供が大人と試合をするやうであります。観覽席の人々は異口同音に「氣の毒だが、清水君は駄目だらう」と囁きあつてゐました。

火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く、さながら龍虎の争です。秒一秒、チルデン君と清水君との球は牙えて來ま



清水君とチルデン君の兩選手の試合

した。観覽者は球の動くがまゝに、その瞳を忙しく右に左に動かしてゐました。とある瞬間、一心不亂に見入つた彼等の瞳に、忽ちチルデン君の片足に、らして取亂した姿が映りました。彼等ははつと思ひました。この時です、清水君がチルデン君の血走つた眼の前、適當の位置に、柔かい、程のよい球を送つてやつたのは、この刹那に於ける清水君は、チルデン君に對する任俠の精神に燃えて、自己の優勝に對する

私
「スポーツマンの精神」の著者矢島鐘二

名譽の感情も、自尊の精神も全く打忘れてしまつたのでした。
「ミスター、シミヅ！」の歡呼の聲と共に、米人三萬人の手は林の如く一齊に振上げられました。私は此の一刹那、あゝ清水君も清水君だが、米人も米人だ」と深く感じました。初めコートに出た時、チルデン君の眉宇には清水君に對する侮蔑の情があり、と見透かされたので、心ある米人は、その態度に少からず不安の念を懷いてゐました。然るに、清水君は、出場早々、この冷たい侮蔑に報ゆるに、溫情春の如き優しい球を以てしたのです。この親切は電氣のやうに米人の胸に響いて、彼等の心の底から感激を涌上らせまし

上州長脇差
昔上野國で長い脇差をさして往來した俠客の稱

上泉伊勢守
劍道神陰流の開祖名は秀綱
上野國箕輪生
永祿頃の人

た。英人は、日英同盟の舊誼もあり、且は日本の應援者の少い關係も手傳つてか、すつかり清水君最眞になつて、盛に同君に拍手を送りました。當時ニューヨークには群馬縣人が五十五人居りましたが、彼等は所謂上州長脇差の氣槩から、此の日は總動員で應援に出かけました。これら敵味方總掛りの歡呼は單なる清水君の妙技に發したのではなく、その尊い任俠の精神に對する力強い感激に發したのであります。清水君と同郷の劍聖たる上泉伊勢守も、定めし「ぞかした、清水」と叫びつゝ、莞爾として笑を地下に含んでゐる事でありませう。
時はこの上ない大事な場合であります。清水君が五・六・七

デヴィスカップ
米國の富豪デヴィス
が各國選手の庭球競
技に於ける優勝者に
贈ることを例として
ゐる大形精巧のカッ
プ

八の四箇月にわたり、十二箇國の選手を薙倒して最後の決
勝に入つた時であります。若し今明二日間の米選手との
競技に於て勝を制し得たならば、日本で最初のデヴィスカ
ップを獲得することか
出来るのであります。



清水テニス選手

をその手許に送つた清水君は、實に偉いではありませんか。
清水君が、我は我にして我にあらず、實に神州男兒を代表し
て立つてゐるのであるといふことを自覺して此の態度を

取つたのは、實に敬服の外はありません。
人格の修養は誠に大切であります。しかし、いきなり釋迦
や孔子を學ぼうと思つても、私どもにはなかく、むづかし
い。私どもに取つて一番近路の修養法は、お互に親切、同情
を以て相接するといふことであります。「武士は相見互」と
いひ、「その敵を愛せよ」といふ語は、誠に尊い教訓であり、又永
久の眞理であります。時代は如何に推移しませうとも、フ
オレスト、ヒルにおいて發揮された清水善造君のその敵に
對する任侠の態度と、貴くも美しいその球の精神とは、蓋し
世界庭球の歴史を飾つて、永久に燦然たる光輝を放つてあ
りませう。これ獨り我が清水君の名譽であるのみならず、

實に我が日本男兒の名譽であります。

(矢島鐘二著「スポーツマンの精神に據る」)

櫻井忠温

陸軍少將
明治十二年愛媛縣松
山生

松浦先生

名は巖岬

四條派

京都の四條に住んで
ゐた松村吳春を祖と
する繪畫の一派

中學校

愛媛縣立松山中學校

一五 鐵 棒

櫻 井 忠 温

私が松浦先生にお目にかゝり、その門人となつたのは、十五歳の春であつた。先生は四條派の畫家であつた。それ以來、私は毎日中學校から歸ると、先生のうちへいつた。先生から描いてもらふ手本を、唐紙の八つ切に描いて持つて行くのである。それを、先生は一々手を取るやうにして直された。

弟子は十四五人ぐらゐあつた。私は手の筋がいゝといつ

て、先生から度々褒められた。そして、存外早く「寫」をするやうになつた。「寫」といふのは、古人の繪を透寫しするので、「寫」

櫻 井 忠 温 筆
兵 士
かきになれるとした
ものである。

私はその後一年にし
て士官候補生になつ



筆蹟

戰爭文學集の口繪と
して昭和三年作者の
揮毫したもの

た。繪かきが兵隊になつたといふので、ひどく先生の機嫌を損じた。

兵隊にはなつたものの、私はこれまで荒つばい仕事をした

ことはなかつた。中學にゐるころは、繪を描く外に、友だちと雑誌をこしらへたりした。鐵棒などにぶらさがつたことは、たゞの一度もなかつた。

それが、兵隊となれば、さうはいかぬ。私の一番困つたのは器械體操であつた。鐵棒にぶらさがつたが最後、びくとも動かないのだから、自分ながら愛想がつきてしまつた。

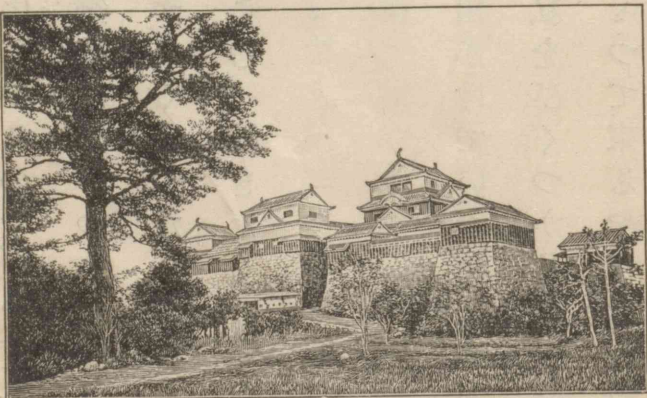
軍曹のKさんは、ある日、私にかう言つた。

「候補生。器械體操が出来なくてどうするのか。ゆくゆく兵卒に教へるなどといふことは、とても出来んぢやないか。やる氣になりさへすれば出来んことはない。しつかり勉強せんといかん。」

私は全くKさんの言ふとほりだと思つた。

私はその夜から床を抜けでて、器械體操場へいつた。そこは舊城の内濠の側にあつて、女が石橋から濠へ下りて來て水際で泣くとかいふ恐しい話のあるところである。だから夜中だれもこゝへ行くものはない。私は鐵棒に飛びついて、どうかして足でも懸けて見ようと思つた。しかし、それは徒勞であつた。

舊城
伊豫の松山城



松 山 城

城の森の中では、ほうく〜と何か鳴いてゐる。何だかわからぬ音が、ときどき、森の中や濠の中でするので、その度毎に私はひやりとした。何度となく鐵棒に飛びついたけれど、疲れるばかりで、追々に體が動かなくなつた。諦めて歸つて來て、こつそりと床にもぐりこむ。泣きたくなつたことが何度あつたかわからない。

雨の降らぬかぎり、夜體操場へ出かけていつた。處が處だけに、月の晩は、いろ〜の影が私をびくつかせた。闇であれば闇で、目の前に何か突つかゝつて來るやうな氣がした。

ときどき、鐵棒に飛びつき損つて、ころんだり、頭を打つたりした事もあつた。鐵棒の柱にもたれて何度泣いたか知れなかつた。

私は鐵棒をすかして見ながら、蛙のやうに飛びついた。けれども、私の足には鉛の棒でも仕込んであるのか、少しもあがらなかつた。そして、徒に腕をしやくつたり、顔をしかめたりするだけであつた。

十日たつても、十五日たつても、足があがらなかつた。十何日目の夜であつた、どういふはずみであつたか、足が棒にかゝつて、ひよいと軽く、猿のやうに體があがつた。だれかが突上げてくれたやうに思つた。私はふらく〜しなが

ら、しばらく鐵棒の上で四方を眺めた。化物でも何でも來いといふ氣になつた。折柄、半圓の月が、城の松の上に懸つてゐた。

私の足は、一方はまだ棒に懸つたまゝである。そして、一方はぶらりと垂れさがつてゐる。兩腕は臂を立てて、一所懸命に棒に立ててゐる。何だか體が宙に懸つてゐるやうで、下を見ると、地面がだんくく下に沈んでいくやうに見える。次の夜が來た。ゆうべの呼吸でうまくやらうと慎重な態度で飛びついた。しかし、見事を失敗であつた。二度、三度續ければ續けるほど、尻が追々に重くなつた。

しかし、私は休まなかつた。すると、三度に一度は足がかゝるやうになり、私の伎倆は、自分ながら、何だか頼しく思はれるやうになつた。

ある日、私はK軍曹から呼ばれた。Kさんは、

「このごろ候補生は毎晩遅くどこかへ出て行くといふ評判だが、事實か。」

といつた。

私はこれを聞くと、涙がにじみ出て來た。そして何とも言はないで立つてゐた。すると、Kさんは、

「候補生は器械體操場にいつてゐるのだらう。」
といつた。

私はKさんが、どうしてこんな事を知つてゐるのかと驚いた。

「はい。」

と言つて、Kさんの顔を見上げた。

Kさんは暫く黙つてゐた。

「候補生。わしの言つたことをよくきいてくれた。わし

はこの十日前、候補生が毎晩ぬないといふことを聞いたので、それから氣をつけてゐると、成程、候補生は床を抜けて出て行く。ついていつて見ると、器械體操場なのだ。」

私の頬には涙がとめどなく流れてゐる。Kさんの前になかつたら、聲を揚げて泣いただらう。

「それからわしは毎晩のやうに候補生のあとについて行つたのだ。候補生がいくらしても鐵棒にあがれないので、餘程出て行つて教へようかと思つたが、候補生の熱心で、きつと今に出来ると思つて、わざと陰で見てゐた。」

私はKさんの前に倒れさうになつた。Kさんがこんなにまで私を思つてゐてくれたかと思ふと、たまらなくなつた。

「このごろは大分うまくなつた。もう一息だ。」

Kさんは、聲をうるませながら、私の肩をたゝいた。

私は其の後、少尉になつた。

Kさんには、その後十年も逢はない。ところが、このごろ突

然函館にゐるといつて手紙をくれた。
私は、今にKさんの恩を忘れてゐない。(煙幕)

夏目漱石

英文學者

小説家

名は金之助

江戸生

大正五年歿

年五十

吾が輩

「吾輩は猫である」

の主人公たる苦沙彌

先生の飼猫の自稱

ボール

バット

Ball

Bat

一六 垣 巡

夏目漱石

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不審を抱くものがあるかも知れないから、一寸説明しよう。吾が輩は不幸にして器械を持つことが出来ない。だからボールもバットも取扱ふことが出来ない。次には金がないから買ふわけにいかない。此の二つの理由からして、吾が輩の選んだ運動は、一文いらす器械なしと名づくべき種類に屬するものだと思ふ。

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられてゐる。縁側と平行してゐる一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。吾が輩のはじめた運動は、垣巡といつて、この垣の上を落ちないやうに一周するのである。これはやり損ふこともまゝあるが、首尾よくいくと御慰になる。ことに處々に根を焼いた丸太が立つてゐるから、一寸休息に便宜がある。

今日は出来がよかつたので、朝から晝までに三遍やつてみたが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる。とうとう、四遍繰返したが、四回目には半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで来て、一間ばかり向ふに列

を正して止つた。「これは推參な奴だ、人の運動の妨をする。ことに何處の鳥だか籍もない分際で、人の堀へとまるといふ法があるものか。」と思つたから、「通るんだ、おい、退き給へ」と聲をかけた。眞先の鳥は此方を見て、にや／＼笑つてゐる。次のは主人の庭を眺めてゐる。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いてゐる。何か食つて來たに違ひない。吾が輩は返事を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上立つてゐた。鳥は通稱を勘左衛門といふさうだが、成程勘左衛門だ。吾が輩がいくら待つてゐても、挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないから、そろそろ歩きだした。すると、眞先の勘左衛門がちよいと羽をひ

ろげた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向から左向に姿勢を更へただけである。此の奴め、地面の上なら其の分に捨置くのではないが、如何にせん、たゞさへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしてゐる餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つてゐては足がつゝかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處には止りつけてゐる。随つて、氣に入ればいつまでも逗



夏目漱石筆

留するだらう。こちらはこれで四遍目だ。たゞさへ大分疲れてゐる。況んや綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障碍物がなくてさへ落ちんとは保證が出来んのに、こんな黒装束が三個も前途を遮つてゐては容易ならざる不都合だ。愈となれば、自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさうしようか。敵は大勢の事ではあるし、殊には餘り此の邊には見馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子の様だ。どうせ質のいゝやつでないには極つてゐる。退却が安全だらう、餘り深入をして萬一落ちでもしたら、尙更恥辱だ。

と思つてゐると、左向けをした鳥が「阿呆」と言つた。次のも眞似をして「阿呆」と言つた。最後の奴は御丁寧にも「阿呆、阿呆」と二聲叫んだ。如何に温厚なる吾が輩でも、これは看過出来ない。第一、自己の庭内で鳥輩に侮辱されたとあつては、吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうといふなら、體面にかゝはる。決して退却は出来ない。諺にも「烏合の衆」といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を据ゑて、そのそと歩き出す。鳥は知らん顔をして、何か御互に話をしてゐる様子だ。愈、癩癩に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に合はせてやるんだが、残念なことに

は、いくら怒つても、のそくとしかあるかれない。
漸くのこと、先鋒を去ること約五六寸の距離まで来て、もう
一息だと思ふと、勘左衛門は申しあはせた様にいきなり羽
ばたきをして、一二尺飛上つた。其の風が突然吾が輩の顔
を吹いた時、はつと思つたら、つい踏みはづして、すとんと落
ちた。

これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元
の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顔を見おろし
てゐる。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。
背を圓くして少々唸つたが、益駄目だ。俗人に靈妙なる詩
の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號

も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。
吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つてゐた。それがわ
るい。猫ならこのくらゐやればたしかにこたへるのだが、
あいにく相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば、致方がな
い。
機を見るに敏なる吾が輩は、到底駄目と見て取つたから、綺
麗さつぱりと縁側へ引上げた。(吾輩は猫である)

一七 先賢佳話

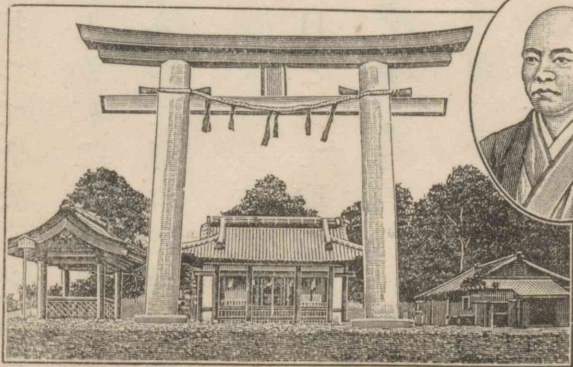
野中兼山

原 念 齋

野中兼山ハ土佐ノ人ナリ。世々國侯ニ仕フ。嘗テ江戸ニ

原念齋
儒者
幕臣
名は善
文化三年(西六六)歿
年四十七
野中兼山
土佐の儒者
名は止
寛文三年(三三三)卒
年四十九
國侯
土佐國主山内侯

來り、歸期ニ及ビテ書ヲ郷人ニ致シテ曰ク「土佐ハ物トシテ有ラザルハ無シ。江戸ヨリ齋シ歸ランハ唯蛤蜊一艘有ルノミ。海路幸ニ恙無クバ、歸ル日ヲ以テ之ヲ饋ラン」下。衆以爲ヘラク「異味ヲ嘗ムルヲ得ン」下。日ヲ計ヘテ歸ルヲ待ツ。既ニ至レバ則チ命ジテ其ノ漕スル所ヲ城下ノ海中ニ投ゼシメ、一箇ヲモ餘サズ。衆怪シミ問フ。兼山笑ツテ曰ク、「此獨リ諸ヲ卿等ニ饋ルノミナラズ、卿等ノ子孫ヲシテ亦之



兼山神社

青木昆陽

徳川幕府の儒者
名は敦書
明和六年(一七六八)卒
年七十二

青木昆陽

ニ飲カシメンタメナリ」下。此ヨリ後、果シテ多ク蛤蜊ヲ生ジ、遂ニ名産ト爲ル。衆始メテ其ノ遠慮ニ服セリ。(先哲叢談)



青木昆陽
白井光太郎藏

青木昆陽嘗テ歎ジテ曰ク「凡ソ罪有ルモ死刑ニ非ザル者ハ、遠ク之ヲ島嶼ニ放ツ。要ハソレヲシテ天年ヲ終ヘシムルニ在ルノミ。然レドモ諸島五穀少ク、常ニ海産木實ヲ以テ食ニ供ス。

コ、ヲ以テ往々餓死ヲ免ル、能ハズ。豈亦痛マシカラズ

ヤ。モシ種藝ノ地ト雖モ、歳ノ歉ナルニ遇ハバ、則チ民菜色無キコト能ハジ。意フニ、百穀ノ外、以テ穀ニ當ツベキ者ハ蕃薯ニ如クハ莫シト。乃チ官ニ陳シ、種子ヲ薩摩ニ求メ、試ニ之ヲ官ノ藥園ニ種エシニ、則チ極メテ蕃殖セリ。是ニ於テ國字ヲ以テ蕃薯考一卷ヲ著シテ、其ノ培植ノ法ヲ述ブ。官、版ニ鏤リ、種子ヲ併セテ、諸島及ビ諸州ニ行下ス。未ダ數年ナラザルニ、處トシテ種エザルハ無ク、今ニ至ルマデ上下之ヲ便トセリ。歳登ラズト雖モ、民遽ニ餓エザル者ハ、實ニ昆陽ノ惠無窮ニ及ベルナリ。其ノ墓門ノ碑ニ題シテ「甘藷先生ノ墓」ト曰ヘルハ、以有ルカナ。(先哲叢談)

萩原井泉水

俳人
名は藤吉
明治十七年東京市生

一八 富士登山

萩原井泉水

お山は實に鮮かに晴れてゐた。夕陽の色どりを失つて、ただ黒く隆々と盛りあがつた偉大な土の塊が、却つて彫刻的な尊嚴を以て仰がれた。空は硝子のやうに透明で、ちぎれ雲の影一つさへなかつた。晝の光が消えうせたにもかゝらず、空氣そのものが光を持つてゐるやうに、薄青く暮れずにゐた。路はお山へ向けて眞直についてゐた。馬は馴れた道を心得顔に、自分の好きな歩調で私たちを運んでゐた。

こゝらの裾野には小松が多かつた。小松の中には秋草がさまざまに咲いてゐるらしいが、丈の低いのは皆夕の色に

女郎花



月見草



埋れてしまつて、脊の高い女郎花と、路傍に近く咲いてゐる月見草とだけが暮れのこつてゐた。ふと西の空を見ると、今しも現れた明星が、たつた一つ、ぱつちりと光つてゐた。それは此の限りもない野の廣さを支配する神の灯かとも見えた。又此の山の昔ながらの尊さを私たちに暗示する表象かとも思はれた。私は、だん／＼薄れる靄に包まれてゆくやうなあたりの景色を馬上から眺め、やがて眼をうつして明星に見入つた。そのとき、何といふ事なしに、涙ぐましいほど美しく寂しい感激が、心こみあげて來るのを覺えた。



富士の裾野 (吉田 口)

「お、月が……」私は覺えず馬上でかう叫んだ。それは東の空に低く研ぎすまされた、眞圓い月が、玲瓏と搖ぎ出た所であつた。月が出ると共に、景色の調子はすべて一變した。今まで一様に薄青かつた空や裾野はくつきりとして、光と影との二つに分れた。空は朗々とした光澤を帯びた。そしてお山はいよ／＼黒く大きな姿を以て出現した。その半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鏤め

られてゐた。それは石室いしむらの灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして私たちの七頭の馬が長い黒い影を投げはじめた。

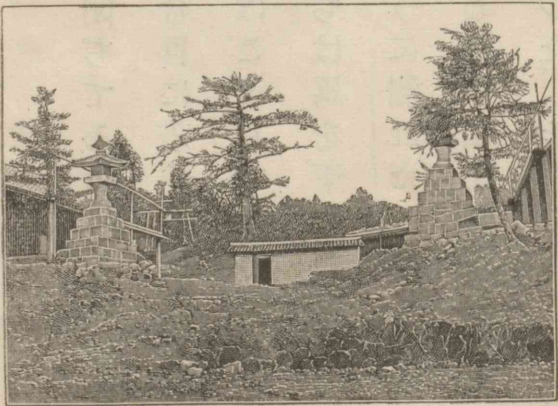
馬返の茶屋に着いた時は、夜氣を感じるほどだつた。「これから山も高くなるし、夜も更けるから」と強力がいふので、私たちはメリヤスの肌着を着こんだ。櫛かみの明りの暗い手元で、饅頭を一杯づつ食べた。そして又めいゝの馬に乗つた。「今夜のお山はいゝぞ」。「こんな日和は今年になつて初めてだ」——馬子と茶屋の主人とが、かう話してゐた。

一合目から上は樹の茂みがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりとかぶさつてゐるので、路は暗かつた。

メリヤス
Medias

先に立つて行く馬子が一人、提燈をつけて馬を導いて行く。

後の馬はたゞ先の馬に續いて暗い中を進むのであつた。勾配もだん／＼急になつた。それに岩や石が多いと見えて、馬の蹄の音がかつ／＼と鋭く鳴つて來た。暗さの爲か、急な登りの爲か、馬は時々躓すいた。さういふ時には、蹄鐵から火花が飛散つた。しかし、樹の枝の疎すになつてゐる處では、月の光が雪のやうに葉の上に輝いて、そこらを明るくした。又ふ



吉田口馬返

と、茂みのとだえてゐる處では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上に溢れてゐた。さういふ處を、馬は勇ましく歩を運んだ。

三合目・四合目の室はもう戸を閉ぢてゐる。その前をひつそりと乗りながら過ぎた。五合目に着くと、馬は心得たやうに、びたりととまつた。樹帯はこゝらで全く盡きて、月はお山一面に照つてゐた。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へてゐた。私たちはその室にはいつて、熱い茶をうまく味はつた。そして用意して來た夕食の辨當を開いた。室には、泊つてゐる人が、蒲團を一枚

かけて、ごろ／＼と寝てゐた。

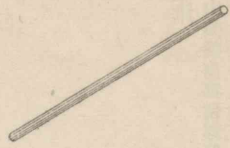
吉田口
山梨縣南都留郡福地
村上吉田
富士山東北麓の登山
口

船津
山梨縣南都留郡船津
富士山の北麓
河口湖畔にある

五合目は「天地之境」と稱せられてゐる。如何にも、このあたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、薄い夕霧がしつとりと襲つて來るやうに思つたが、それはもや／＼とした白い雲となつて、こゝから見ると、低く裾野一面を蔽うてゐる。そのあなたに、吉田の町の灯がちら／＼と光つてゐる。それよりもなほ遠くなほ幽かに見えるのが船津の灯であつた。

馬と馬子とを返してから、私たちは強力を先に立てて、静かに静かに一歩々と踏んで登つた。この夜ふけの山を踏

金剛杖



んでゐるものとしては實に私たちだけであつた。鳥もゐず、
蟲もゐず、死のやうな静寂の中に、七人の金剛杖の音のみが、
かちり／＼と岩にあたつて鳴つた。その杖は、五合目の室
で「天地之境」といふ焼印を押してくれたものだつた。月は
まことによく冴えて、何の遮るものもない山の肌は、晝のや
うに明るかつた。時計を出して見ると、十時を二十三分過
ぎてゐるその針が、はつきりと月光に讀まれた。

自分の服にさはつて見ると、露でしつとりとしめつてゐた。
蘆や笠は暑さを凌ぐために身につけて來たのだが、それが
今では露を凌ぐ爲のものとなつた。山肌の岩や砂にすが

濱梨

一に岩梨
富士や日光などの高
山に地を這つて生え
てゐる

葉は楕圓形
實は大豆の大ききで
甘酸ばい



薊



ベンチ

Bench
腰掛

精進の宿

山梨縣西八代郡上九
一色村精進なる精進
湖畔の宿

つて生えてゐる僅かの青いもの——
偃松や濱梨の木や薊
など——の葉にも露が光つてゐた。空を見ると、疎な星が、
大きな露の雫のやうにきら／＼してゐた。さうした星が、
ふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると、
白い雲が海のやうに浪立つ下界の方へ——。

六合目の室はびつたり閉ぢてゐたが、その前に差掛けのベ
ンチが出來てゐる。そこへ腰をかけて休んだ。私は精進
の宿を立つ時新しくかへて來た草鞋を踏切つたので、強力
の背から一足取出させて穿きかへた。室の戸があいて、こ
こに泊つてゐた男が出來て來た。その男は崖の所へ行つて、

あたりを見まはして、ぶる／＼と身ぶるひをして、「おゝいゝ月だな」といひつゝ、又室の戸をびつたりと締めた。



精進湖から望んだ富士山

と這つて、歩みは著しくはかどらなくなつた。「懺悔懺悔——六根清淨——」登山の行者が唱へる此の言葉を、先へ行く

者と後になつた者とお互に唱へかはして、心を引きしめあつたりした。

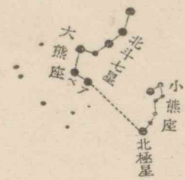
七合目を越して、八合目の室に入つて少し休んだ。時計を見ると、もう一時を過ぎてゐた。非常に睡いやうでもあつたが、こゝでなまじひに眠つてはいかぬと思つた。室の中の爐では、木の枝を焚いてゐた。その煙が非常にけむくて、目から涙がぼろ／＼と落ちた。やはり目が疲れてゐ



富士山八合目の石室

る爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて、別室のやうに仕切つて泊つてゐた外人の一群は、もう起きてゐた。頂上で御來迎を拜まうとするならば、そろそろこゝを出なければならぬ頃だ。いつの間にか爐の傍に横になつて眠つてしまつてゐた強力の青年を呼起して、私たちは又登り始めた。山に酔つたといふよりも、睡眠を奪はれたためであらう、頭がふらふらする。さういふ者が私の外に一人二人あつた。自分は蘆を山の勾配のまゝに砂の上に敷いて、ごろりと寝て見た。砂の上には草一本の影もない。月はちやうど額の上に懸つて、いよゝ天心に澄みきつてゐる。頭をずつ

北斗七星



と仰向けにした視線の果に、北斗七星がきらりと光つてゐる。私は其の一つをじつと見つめてゐた。と、其の星がふらふらと動き始める、すうと流れるのではなく、小さな螺旋を描きながら踊つてゐる。不思議だと思つて、他の一つの星を見つめた。すると、其の星も亦螢のやうにゆらゆらと舞ひはじめた。これは幻覺だ。さう思ふと、眼の疲勞の甚だしい事がわかつた。また月を見た。月の光がまぶし過ぎて、涙がにじみ出た。

九合目には久須志神社といふお宮がある。そこへはいつて暫く休んだ。神職が二三人、なか／＼寒い。併し今朝は

氷がはらないから。——などと、もう朝の言葉をかはしてゐた。さうして、私たちには、「こゝは日の御子といつて、東へ眞正面の處です。こちらで御來迎をお拜みなさい」といつたが、目の出までにはまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上を指すことにした。「頂上へ行く方は御祓をしていらつしやい。」神職はかういつて、祝詞をあげてくれた。それは、今日のよき日にお山へ詣でる善き人々の一族の平安を祈るといふ意味を、神代の言葉を集めて綴つた長いものであつた。そして、大きな御幣で、皆の並んで下げた頭の上をばさりくと祓つた。外へ出ると、これまで感じなかつた風が冷えくと動いてゐた。それが黎明の近いことを

思はせた。又その風が、ふらくした頭を幾分かしつかりとさせてくれた。

月の光は漸く衰へ始めた。その上路が東へ廻つた爲、西へ傾きかけた月が、頂の峯の陰になつてしまつた。光と影との差別は薄らいて、裾野の夕に見たやうな混沌とした青白い色が、一様に漂つて來た。その混沌たるものの中から、新しい光の生れるのを待つばかりになつた。下界は——殊に甲州に寄つた方は——雲がびつしりと鎖してゐた。その雲のはづれに、今までは雲と同じやうに白く見えてゐたものが、大きな勾玉の形をした湖水であるといふけぢめも、

勾玉



山中湖
 山梨縣南都留郡福地
 村上吉田の東南八軒
 なる中野村にある
 五湖
 本栖湖
 精進湖
 西湖
 河口湖
 山中湖

やつと明らかに認められた。それが山中湖であつた。五湖の一として見残したこの湖を、私たちはかうして鳥瞰的に眺め得たのであつた。

頂上の室ではもう灯を消してゐたが、屋根の下はうす暗かつた。そこへ私たちは上つて、御來迎を待つことにした。じつとしてゐると、寒さはひし〜と身に迫つて来る。手は凍え、吐く息は白く見えた。襦袢すけもんを借りてかぶるものもあつた。下の室を早く立つて來たと見える人が、ちらほらと登つて來て、室はいつか一杯になつてしまつた。皆草鞋のまゝで上るのだが、脚と脚と入れちがへて餘地のないやうな處へ、牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黒

な甘酒だけは、うまかつた。



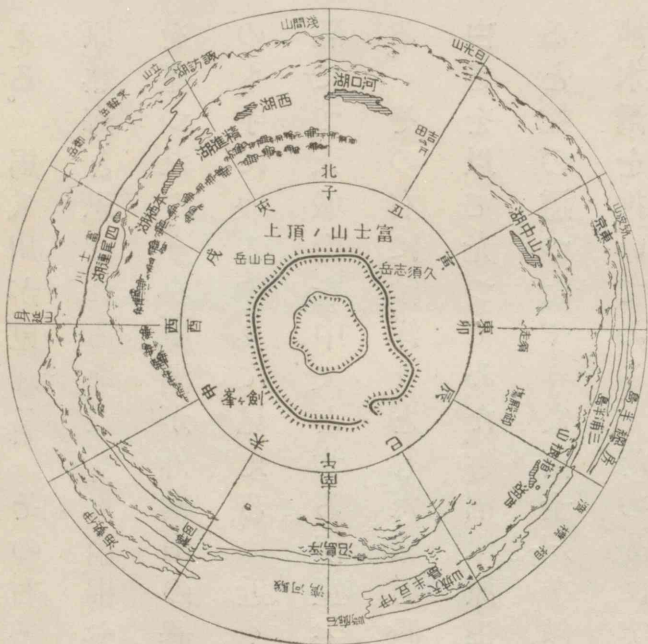
御 來 迎

口々に傳へられて、室の中にもた者も皆外に出た。大分明

曉紅——朝の始る前の先觸として、かんがりとぼかし染にせられる地平線の赤さは、かうした高みから眺める時には、たゞに美しいばかりでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな純潔な尊さに、にじみ出てゐる。「あゝ、ぢきに御來迎だ。」さういふ言葉が

るくなつた岩の上には、霜がおりてゐた。それを踏んで、寒さうな緊張した顔が並んだ。地平線の赤さは、うつすりと吸取られて、ある神聖なものの誕生をつゝんでゐる幕のやうな霞が、つや／＼しい光を帯びて來た。——つと、一點輝いた朱の色が、鋭い刃で突破つた皮膚から滴る血のやうに霞の幕を押分けたと思ふ間に、その朱の一點が見る／＼ひろがつて、麗しい太陽の姿となつた。忽ち新しい光線は地上に、又天上に漲つて來た。その第一の光線は、まつしくらに、この頂上に立並んでゐる私たちの瞳に届いた。朗かな朝は來た。大空は實によく晴れてゐた。大地も實

によく晴れてゐた。太陽を生んだ後の霞が消えた處に、煙



富士山野中至製マ
ラノバ山士富
マラノバ山士富
製製製製製製

の靡くやうに仄かに這つてゐるのは房總半島である。海は空と差別がないが、雲のやうに置かれた大島が、そこは太平洋の中だといふ事を示してゐた。その手前に、更

に鮮かに一抹の線を引いてゐるのが三浦半島である。海

大島
伊豆半島の東方海中にある島

三浦半島
神奈川県東南方に突出してゐる半島

江ノ島
神奈川県南方鎌倉の西にある小島

馬入川
甲斐國桂川の下流相模國を貫流して相模灘に入る

大磯
神奈川県中郡大磯町

愛鷹山
富士山の南麓に峙つ山

天城山
駿東・富士の兩郡に跨つてゐる

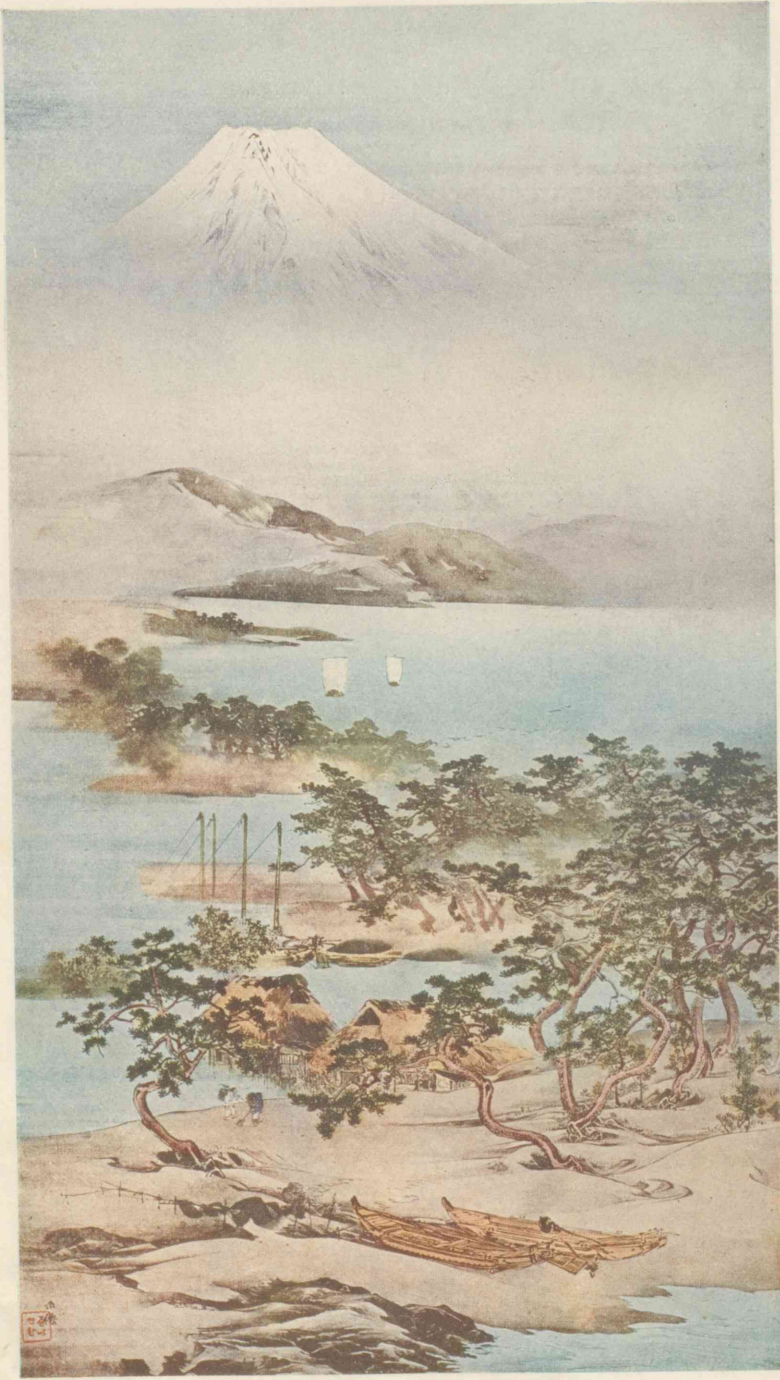
伊豆半島の中央部に峙つ山

三保ノ松原
静岡縣安倍郡にある

名勝

御前崎
駿河灣の西南に突出した岬

岸線に沿うて目を移すと、小さく、しかもしづかに江ノ島が見える。馬入川が見える。その右手は大磯であらう。小田原熱海と思はれるあたりも、箱根や足柄の山々も、盤に水銀を盛つたやうな蘆湖が外輪山の器の中に秘められてゐるのも、手に取るやうに見える。近くは愛鷹山の青い隆起を隔てて、天城山を中央とする伊豆半島が、すうつと延びてゐる。その右には、洋々とした駿河灣が描き残された素絹の白さを以て光つてゐた。沼津・原・田子・浦と順々に南を眺めると、蛇の這つたやうな富士川を越えて、三保、松原が小さく清水灣を抱いてゐる。その先に突きでてゐるのは御前崎であらうが、そこらにはもう霞んでゐる。私は此の大きなパ



筆僊米田保久

士富の保三

上横島市一江沼町五九八番地

小林二所前

Shudo

パノラマ

Panorama

二兒へ

明治四十一年一月十日著者が自ら認め
て神奈川県小田原在
酒匂に轉地中の二兒
に贈つたもの

大町桂月

文章家

名は芳衛

土佐國高知生

大正十四年歿

年五十七

伊澤先生

教育家

貴族院議員

名は修二

樂石社を起して吃音

矯正の事に力めた

大正六年薨

年六十七

ノラマのやうな景觀に心を放つてゐた。

太陽はずん／＼と高く昇つて、強い、とろ／＼とした光線が、
靈山の絶頂から下界へ向けて擴がつていつた。 (山水巡禮)

一九二二兒へ

大町桂月

毎々手紙をくれて嬉しい。伊澤先生が二十日まで居
るがよからうとのお手紙ゆゑ、そのつもりで大いに勉
強するがよい。十五六日頃ちよつと行くかも知れぬ
が、二十日には必ず迎へに行く。土産物はその時ゆつ
くり買つてよからう。
先生よりのお手紙に、「決して父の眞似をしてはならぬ。」

といふことをお前たちに誓はせるとの事ゆゑ、そのつもりで、先生のおつしやる事を承るがよい。この父の吃音の眞似をさせたくないことは言ふまでもない。その外、父には缺點もあり、悪癖もある。世上どんな人でも長所と短所とがあるものだ。然るに人は他人の短所には氣づき易いが、他人の長所には氣づきにくいものだ。この父は短所も多いけれど、男らしいといふ氣象は大いに持つてゐる。これはお前が年を取るにつれて分つてくる。文筆も決して人後には落ちぬ。この二點は大いに眞似てよい。

「餓ゑては食をえらばず」と古の人は言つた。お前は肴

が嫌ひだが、餓ゑたら必ず食へる。嫌ひでも食つてゐれば、終には好きになる。何かの鐘詰でも送ることはわけも無いが、それでは却つてお前たちのためにならぬ。長じて兵隊に出たり、旅行したり、人の家について、その他いろいろの時にこまる。人は食物に好き嫌ひがあるやうに、萬事氣隨氣儘になり易い。氣隨氣儘では世は渡られぬ。何事もしんぼうが大切だ。この事をよく心に銘するがよい。今日は父も母もせはしくて郵便局へ行けぬから、爲替は明日あたりおく。

(桂月全集)

西條八十

詩人
明治二十五年東京市
生

二〇 新 秋 頌

西條八十

山より戻れる若者よ、

新秋はほゝゑみて君を迎ふ。

雪白の峻峯を登攀して、

君が瞳は今崇きあこがれに満つ。

海より戻れる若者よ、

新秋はほゝゑみて君を迎ふ。

激澗たる海波とあそびて、

高邁の氣今君が胸に溢れたり。

海より山より戻れる若者よ、

人寰に入りて、

山も海も今日始めて君が心に生く。

雪峯の-high 理想を追へよ、

蒼海のひろき愛を生活せよ。

(少年詩集)

二一 ツェッペリン伯號に乗りて

圓地與四松

午前六時起きる。今日は十九日、霞ヶ浦着陸の日である。

少し靄がかゝつてゐたが、やがてすつかり日本晴に晴渡つ

た。午前七時頃から北海道を横斷し始めて、七時半には内

ツェッペリン伯號

獨逸の航空界

Graf Zeppelin の覇者ツェッ

ペリン伯の名

を冠した飛行

船

圓地與四松

東京日日新聞記者

明治二十八年石川縣

生

十九日

昭和四年八月

霞ヶ浦

茨城縣常陸國の南部

にある我が國第二の

大湖

湖の西岸に海軍航空

研究部及び航空隊が

ある

内浦灣

渡島廳振兩國に包ま

れた噴火灣

ハンカチ
Handkerchief
駒ヶ岳
北海道渡島國北部の
火山
エッケナー博士
Dr. Hugo Eckener
この飛行の總指
揮者
レーマン船長
Captain
E. A. Lehmann

浦灣に出た。北海道の陸地にさしかゝつた頃、その燈臺に日の丸の國旗を出して我々を歓迎してくれたのは、實に嬉しかつた。處々の村落でも、村人たちが往來に出て、ハンカチを振つたり、旗を振つたりしてくれた。海の上に出てからも、ずっと右手に北海道を眺めながら進んだ。八時半には遙かの彼方、右手に駒ヶ岳を眺めることが出來た。北海道を去つてからは、奥州の山や川を右に見ながら進んだ。空は全く晴渡り、美しい故國の山々が近く蜿蜒として連なり、海上には又小さくもかはいらしい發動機船が躍つてゐる。乗客は誰一人としてこの美しい日本を歎賞せぬものはなかつた。エッケナー博士も、レーマン船長も、心から嬉

イセリン君
Iselin
瑞西國チューリッ
ヒ市の人
退役陸軍中佐
A. D.
アルパカ
Alpaca
アルパカといふ
山羊類の毛を横
糸にして織つた
もの
北野君
大阪朝日新聞記者北
野吉内

しさうであつた。
十二時四十五分頃、一臺の飛行機が我々を出迎へるために飛來し、暫く後について來た。次第に夏らしく暑くなつて來た。イセリン君の如きは、はやアルパカの上着に着換へてゐる。そして「もう暑くなつたからね」と得意になつてゐる。かれこれするうちに、午後二時になつた。誰も落ちつかない、たゞはち切れさうな期待で東京の空に憧れてゐる。折柄、樺太廳長官縣忍氏から、私と北野君とに宛てて、「今回天空一周の壯舉を企てたるグラーフ、ツェツペリン號を、日本帝國に於て、最初に樺太の上空に迎ふるは、衷心歡喜に堪へず。全島民を代表して深甚なる敬意を表す。

貴下並に乗組員各位の御健康を祝し、併せて絶大なる御成功を祈る。」
といふ電報に接した。



エッケナ博士

午後三時三十五分には四臺の飛行機が来て、迎へてくれた。そのうちに本社機もやつて來た。三時三十六分には太田を通過した。人々はみな往來に出で、空を仰いで眺めてゐた。私は一所懸命で荷物を片づけた。その間にもう牛久沼に來た。時は四時に十五分前である。漸く荷物の支度をす

本社機

東京日日新聞社の飛行機

太田

茨城縣久慈郡太田町

牛久沼

茨城縣稻敷郡牛久沼の西部にある沼

ホール

Hall 廣間

カメラマン

寫眞師

Cameraman

藤吉少佐

海軍少佐藤吉直四郎

航空司令

海軍少將枝原百合一

タイプライター

Typewriter

谷中

上野公園の北方

ました私は、ホールへ出た。見れば、カメラマンは相呼應しながら撮影に忙しい。さうかうするうちに、はや利根川だ。「もう何十分で東京か」とイセリン君が聞きに來る。そこへ藤吉少佐が飛んで來て、航空司令に電報を出すのだから、タイプライターを打つてくれまいかといふ。「今より東京横濱を廻り、六時より七時の間に着陸す」といふ電報である。グラーフツェッペリン號は今や關東八州を眼下に瞰て東京に進みつゝある。四時十五分、谷中の方面から東京に入つた。先づ上野公園が見える。次いで博物館の青色や丹色の屋根が目に入る。美術館は想像よりも大きく見える。

モーター
Motor
發動機

廣小路
上野公園の前の大通

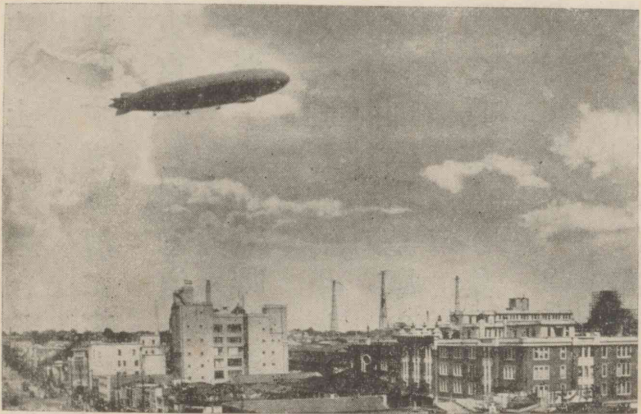
松坂屋
上野廣小路にある百貨店
ドラモンド、ヘイ女史

Lady Grace
Drummond
Hay
北米合衆國の婦人新聞記者

上野公園の西郷の銅像のあたりは非常な群衆だ。恐らく手を振りつゝ萬歳を叫んでゐるのであらう。モーターの音に妨げられて、その叫は聞かざるべくもないが、その熱狂の状だけは、それと窺はれる。廣小路に大きな建物が聳え立つてゐて、その屋根は満員客止といふ盛況だ。これはいはずも知れた松坂屋だ。やがて私はホールを去つて航空室に赴き、ドラモンド、ヘイ女史と並んで見おろす。女史はさも満足げに、いよゝゝ参りましたねといふ。今や我々は銀座通を前方に見つゝ、東京驛の上にさしかゝつた。驛前から宮城前へかけての廣場は實に美しい。我は遙かに莊嚴な宮城を拜した。宮城の青錆びた屋根は、

丸の内
宮城の東北に隣る一郭

品川
東京市品川区品川町
大森
東京市大森區大森町
總持寺
曹洞宗の本山
神奈川縣横濱市鶴見區にある



銀座通上空のベツペリノ伯號

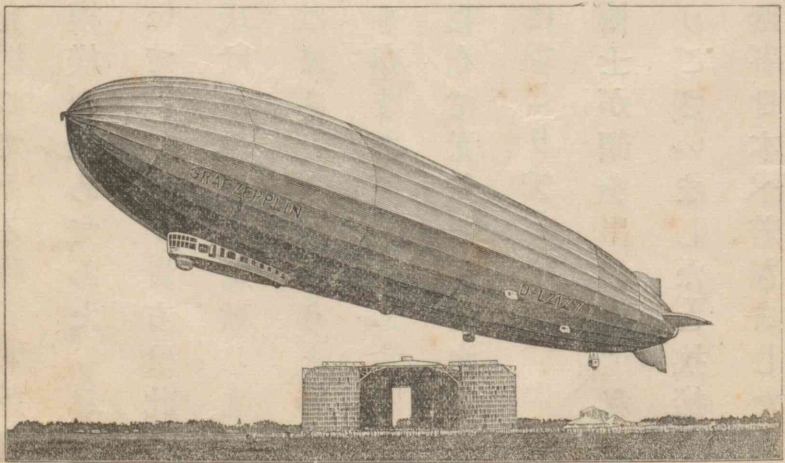
丸の内一帯の洋式建築と一種の對照をなして、類のない眺である。わが東京日日新聞社の屋根にも、同僚が澤山集つてゐる。おゝわが友よ、故國の山河舊知に遠ざかつてゐる此の身は、今や空中から君等に對面する機會を得て懐かしさに堪へない。遙かに挨拶を送る。船はいつしか品川から大森へと飛んでゐる。鶴見の總持寺が見える。もう鶴見に來たのだ。東京から十分もたゝない。

カウダ博士
Dr. Kauder
獨逸新聞テンゴ紙
の主筆

あちこち見まはしてゐるうちに、もう横濱だ。船が丁度港内の上空を過ぎる時、汽船は一齊に汽笛を鳴らした。五時すぎ横濱に來たわがグラーフ、ツェツペリン號は、再び東京へと同じ道を引返し、ひたすら霞ヶ浦へと急ぐのであつた。もう六時である。夕日影は曇れる空にその姿をかくして、黄昏は今しも野末を包まうとしてゐる。そら來た、霞ヶ浦に、格納庫の上に。六時三分だ。庫前の野原には、無数の見物人が集つて、頻に手を振つてゐる。グラーフ、ツェツペリン號は更に霞ヶ浦を横ぎつて、一回轉して格納庫に向つた。カウダ博士は一所懸命にタイプライターを打つてゐる。着陸したらすぐ電報を打つために

ミツツエ
Mütze
ドイツ語で鈔の
ない帽子

その文案をたゞいてゐるのであらう。ヘイ女史は輕快な洋服に着換へ、茶色のミツツエをかぶつてホールへ出て來た。「どうですか」と話しかけると、にっこりとして、「わたしは非常に幸福です。なぜつて、ふたゝび好きな日本を見るのですもの」といふ。午後七時近くなつて、グラーフ、ツェツペリン號はもう地上に



霞ヶ浦格納庫とツェツペリン伯號

ゴンドラ

Gondola 飛行船について
ゐる吊船

フォン、ヴィガント

Karl von Wiegand 米國ハースト新
聞社の世界代表

着いた。水兵たちがゴンドラを擔つてゐる時、我々乗客一同はホールに集り、珍しい空の模様を眺めてゐた。私はフォン、ヴィガント氏の肩をたゝいて、「どうです、貴方は此の着陸をどう思ひますか」と聞くと、氏は「いや、全く驚歎しました。それに、この飛行場の立派な事は、まあ、どうでせう」といふ。傍にゐたドラモンド、ヘイ女史も亦、まあ、何といふすばらしい着陸ぶりでせう。あの若々しくて元氣のよい水兵さんたちのかはいゝこと」といつてにつこりする。そこへ航空室からエツケナー博士が顔を出した。私が博士の側へよつて、「いろく、有難うございました」と挨拶すると、博士は堅く握手して、「これで無事日本へ着きました。あ

メヒヤス博士
スペイン國マド
リッド市の醫師
スペイン王アル
フォンソの侍醫
であつた

なたも御満足の事でせう」といふ。すると、側にゐたメヒヤス博士やイセリン君が「圓地君は故國に歸つて來たのだから、さぞ嬉しいでせう。一番幸福なのは圓地君ですね」と肩をたゝいてくれる。エツケナー博士も大きく笑つて、「はつはつ、圓地君は今日は神様と一緒にをるやうなものさ」といつた。そしてまた航空室へとその姿を消した。

(東京日日新聞)

三三 鷹山公

至孝

重野成齋

上杉治憲、鷹山ト號ス。幼ニシテ至性有リ。善ク其ノ父ニ

重野成齋

漢學者
名は安釋
帝國學士院會員
貴族院議員
文學博士
明治四十二年薨
年八十三
上杉治憲
羽前國米澤藩主
文政五年(四六)卒
年七十二

事へ、服養備ニ至レリ。常ニ謂ヘラク、「孝ハ百行ノ本ナリ。」ト。

躬行率先シ、推シテ以テ親族

上 子弟ニ及シ、皆誨フルニ孝悌

山 鷹 杉 ヲ以テセリ。父散樂ヲ好ム。

治憲爲ニ屢之ヲ演ジテ、以テ

其ノ歡ヲ奉ゼリ。嘗テ九十

歳以上ノ老者ヲ集メテ尙齒會ヲ舉グ。治憲父ヲ奉ジテ之

ニ臨ミ、躬ラ父ニ饋薦ス。治下翕然トシテ孝ニ興レリ。

(帝國史談)



安井息軒

幕末の儒者

日向國依肥藩士

名は衡

字は仲平

息軒はその號

明治九年卒

年七十八

好學

安井息軒

細井平洲

尾張の儒者

名は徳民

享和元年(西六)歿

年七十四

鷹山公學ヲ好ミ、尤モ師儒ヲ敬重ス。其ノ師細井平洲嘗テ

米澤ニ來リシトキ、公鹵簿ニ

テ之ヲ郊ニ迎ヘテ曰ク、「今日

先生ノ爲ニ前驅ス。」ト。騶從

洲 平 井 細 ヲ屏去シ、歩シテ之ヲ導キ、且

行キ且顧ミ、以テ城ニ至ル。

觀ル者堵ノ如ク、皆公ノ其ノ貴キヲ忘レ、而シテ平洲ノ道ヲ

以テ自ラ重ンズルコトヲ歎ゼリ。(讀書餘適)



細井平洲

江木鰐水

儒者

名は猷

安藝の人

明治十四年歿

年七十二

節儉

江木鰐水

上杉鷹山公世子タリシトキ、既ニ儉ヲ以テ國ヲ化スル志有

筆蹟

國家は先祖より子孫へ傳候國家にして我私すべき物には無之候

リ。封ヲ襲グニ及ビ、身綿衣ヲ穿テ、節儉モテ下ヲ率キルモ、士猶ホ帛ヲ衣テ命ニ從ハザル者有リ。公憂勞シ、一夕寢ヌル能ハズ、手衣ニ觸ル。起チテ曰ク、「臣子ノ命ニ從ハザルハ

國家ハ

先祖より子孫へ傳候國

家あり我私すべき物には無之候

上杉流 杉芳流 鷹山遺墨

我ノ罪ナリ。吾綿衣ニシテ其ノ裏ヲ帛ニス。是、我欺ヲ行ヘルナリ。」ト。是ニ於テ衣服衾枕マデ寸帛ヲ用ヒズ。封内靡然トシテ、一時ニ命ニ

從ヘリ。嗚呼志ヲ立ツルコト此クノ如ク、誠ヲ行フコト公ノ如シ。宜ナルカナ、世ノ名君ト爲リ、封内其ノ德ヲ稱シテ今ニ至レルコト。

二三 安井息軒

森 鷗 外

「仲平さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、「仲平さんは不男だ。」といふ陰言が清武一郷に傳へられてゐる。

仲平の父は日向國宮崎郡清武村に二段八畝程の宅地を持つて、そこに三棟の家を建てて住んでゐる。財産としては宅地を少し離れたところに田畑を持つてゐて、年來家で漢學を人の子弟に教へる傍、耕作を輟めずにあつたのである。併し仲平の父は三十八の時江戸へ修業に出て、中一年置いて、四十の時歸國してから、飢肥藩に任用されるやうになつ

森鷗外

名は林太郎

醫學者

文學者

醫學博士

文學博士

陸軍軍醫總監

東京帝室博物館總長

石見國津和野生

大正十一年薨

年六十一

父

日向の儒者

名は朝宗

字は子全

號は滄洲

文化六年(西元)歿

年六十餘

飢肥藩

日向國南那珂郡

藩主は伊東氏

たので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、仲平が六つの時、父は兄弟を残して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人共毎朝書物を懐中して畑打に出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。父が始めて藩の教授を命ぜられた頃の事である、十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと道で行逢ふ人が、皆言合はせたやうに二人を見くらべて、連があれば連に何事をかさゝやいた。脊の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、脊の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、

筆蹟

旅行中心得の條々
道筋に名所古跡あら
ば必ず見物すべし疲
れたりとして見ざれば
後に悔ゆる事多き物
なり柔和謙遜は旅中
第一の寶なり假にも
人と争ふ心あるべか
らず武藝の試合は勝
負を重んずる故わけ
て此心得を重しとす
夢の間も忘るまじき
事

丑正月望前一日
半九齋

旅行中心得の條々

道筋に名所古跡あらば必ず見物すべし疲れたりとして見ざれば後に悔ゆる事多き物なり柔和謙遜は旅中第一の寶なり假にも人と争ふ心あるべからず武藝の試合は勝負を重んずる故わけて此心得を重しとす夢の間も忘るまじき事

丑正月望前一日半九齋

安井息軒 筆藏

いかにも不釣合に見えたからである。兄弟同時にわづらつた疱瘡が兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕になつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時疱瘡して片目になつてゐるのに、又仲平が同じ片目になつたのを思へば、「偶然」といふものも残酷なものだといふ外はない。

仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで朝は少

し早めに食事を済ませて、一足先に出て、晩は少し居残つて仕事をして、一足後れて歸つて見た。併し行逢ふ人が自分の方を見て連とさゝやくことは止まなかつた。そればかりではない、兄と一緒に歩く時よりも、行逢ふ人の態度が餘程無遠慮になつて、さゝやく聲も常より高く、中には聲をかけるものさへある。

「見い。けふは猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を讀むから妙だ。」

「なに。猿の方が猿引よりは好く讀むさうな。」

「お猿さん。けふは猿引はどうしましたな。」

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪

篠崎小竹

大阪の儒者

名は弱

嘉永四年(五二)歿

年七十一

へ修業に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に着いて、長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に大豆を鹽と醤油とで煮て置いて、これを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが、あれでは體が續くまい」と氣遣ふほどであつた。中一年おいて二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、とかく病氣で、とうとう二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

古賀侗庵

昌平饗の儒者

名は煜

精里の第三子

弘化四年(二五七)歿

年六十

昌平饗

昌平坂御學問所

幕府の學校

今の本郷區湯島にあ

つた

松崎謙堂

掛川藩の儒者

名は復

肥後生

弘化元年(二五八)歿

年七十四

林

林大學頭

しのぶが岡

上野の岡

聖堂はもと上野に

あつた

其の後、仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて昌平饗に入った。後世の註疏に據らず經義を究めようとする仲平の爲には、古賀より松崎謙堂の方が懐かしかつたが、昌平饗に入るには林か古賀かの門に入らなくてはならなかつたのである。痘痕があつて、片目で、脊の低い田舎書生は、こゝでも同窓に馬鹿にされずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓着に黙りこんで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのからかひに來た友達が讀んで見ると、

今は音をしのぶが岡の時鳥いつか雲ゐのよそに名のらん

と書いてあつた。

「や、えらい抱負ぢやぞ」と、友達は笑つて去つたが、腹の中では稍、氣味悪くも思つた。これは仲平が十九の時、漢學に全力を傾注するまで國文をも少々研究した名残で、わざと流儀違の和歌の眞似をして同窓の揶揄に酬いたのである。

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にされた。そして翌年藩主が歸國される時、供をして歸つた。

江戸がへり、昌平饗仕込と聞いて、仲平さんはえらくなりなされるだらう」と評判する郷里の人たちも、痘痕があつて、片目で、脊の低い男振を見ては、「仲平さんは不男だ」と陰言を言はずには置かなかつた。

大儒息軒先生としてその名を知られるやうになつたのは、仲平が四十八歳の頃からである。(鷗外全集)

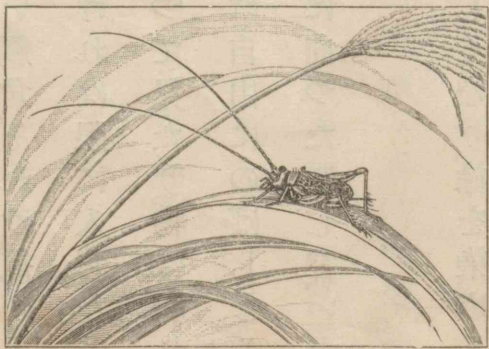
二四 草雲雀

横山桐郎

横山桐郎
昆蟲學者
農林省蠶業試驗所技師
農學博士
東京市生
昭和七年卒
年三十九

毎年八月になると、私はぢれるやうな思で、その鳴き出すのを待つ蟲がある。その蟲は實に小さなからだをした、先づ小豆粒くらゐな、淡黄いろい塊としか見えないけれども、少し念を入れて見ると、渦卷形の浮彫ウヅマヅリのある淡黄いろい翅を透かして、黒つぼいからだの色が透いて見えて、丁度金蔴繪を見るやうである。そして首から脚には淡黒色の斑が散り、細かい毛が一杯生えてゐて、見かけによらない毛むくじ

やらである。だが、頭の兩側にひよいと突きでた黒い眼元と、翅の後の小判形の圓みとは、何ともいへない可愛らしさと柔かさとを此の蟲に與へてゐる。そして頭の先には細い絹絲のやうな二本の觸角が生えてゐる。それとはたゞ見たのでは、つなぎ目も何もない一本の細絲だけれど、若し蟲眼鏡でのぞいて見るならば、實に小さな節の連なりであるのにびつくりするであらう。その一節々は○、二耗ほどしかないが、それが二百程もつながつて、からだの十倍もの長さとなつて



(大倍二) 雀雲草

ある。此の小さな一節々々には、又それこそ眼に見えないやうな細かいく、初毛が生えてゐる。自然の細工はどこまで精緻なのだらう。彼は此の細い觸角、それは籠に入れて置いて、日にも透かして見なければ眼に入らないやうな觸角をいつも意味ありげに振つて見たり、物に觸れて見たりする。そして狭い籠の中では自由にのびしきるこどが出来ないので、先の方が弓なりに曲つたりして、いかにも窮屈さうに、又不満さうに見える。

八月も半ばを過ぎて、朝夕が幾分涼しくなり、縁を染める日の光にも眼立つて赤みが加はる頃になると、彼はどこからともなく、ひよつこりと現れて、黄金の豆電鈴を振るやうな、

研究室
東京市杉並區蠶業試
驗場
もとは東京市の外

ラフカディオ、ハー
ン

文學者
もと英國人
歸化して小泉
八雲といつた
東京帝國大學
講師
明治三十七年
卒
年五十五

細かい音の漣を秋の澄んだ空氣の中に惜しげもなく振りまき、漂はす。此の蟲は私の通つてゐる郊外の研究室の附近には實に澤山棲んでゐる。そして私は此の蟲の振りまく妙なる音の洪水にひたりながら、書を読み、或は顯微鏡をのぞきつゝ、言ひしれぬ感に打たれ、又此の蟲のため「草雲雀」の名篇をのこして逝いた文豪ラフカディオ、ハーンを想ひ出しては、更に此の蟲に對して歎賞の念を深める。彼は僅かに七耗か八耗に過ぎない小さな蟲であるが、その雄が奏で出す祕曲は、最高の官能を備へた人類の心をさへ動かし得る力を持つてゐるのである。さう思ふ時、私は人間仲間の奏でる音樂といふものが、甚だ心細いもののやうな氣が

してならない。(優曇華)

天橋

天橋立

京都府丹後國與謝海の中央に突出してゐる砂洲

長さ約四軒

日本三景の一

徳富健次郎

文學者

號は蘆花

肥後國水俣生

昭和二年歿

年六十

切戸

京都府與謝郡吉津村

大字文殊と天橋立の

長洲との間の小海峡

こゝの波を文殊の波

といふ

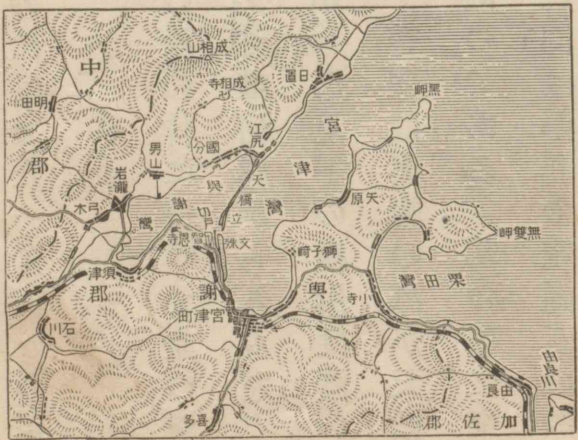
二五 月の天橋

徳富健次郎

ぎい、と艚が響いて、舟は墨染の濃い松影から、白々とした月下の海に出た。海というても浅い洲の上の水である。何といふ好い月夜か。雲一つ無い空にのみ照るかと思へば、水中に天あつて、そこにも月は壁の如く光つてゐる。何といふ清い水だらう。月明りにも、水底の砂が分明に數へられる。こゝは橋立切戸の渡か。若しくは天河をいま渡りつゝあるのではあるまいか。船頭よ、ゆるやかに舟をやつてくれ。もつと徐かにやつてくれ。しかし、如何程徐かに

舟をやつても、彼岸は近い。舟はもうするくと天橋の渚に着いてしまふた。

舟からあがつて踏む白砂は、もう天橋立である。こゝらは植ゑついで間もないと見え、松は稚木で、疎である。月光に雪と輝く砂を踏んで、だんく奥へ入つて往く。歩むに連れて松影はだんく深くなり、はては月の光よりも松の影が多くなつた。



天橋立附近

何といふ明るい月だらう。仰げば松の葉々々が白金のピンを敷ふる如く讀まれ、俯く砂にはまた一葉々々の影が黒く鮮かに讀まれる。

松間の路の曲る處に來た。余は松の幹に倚つて立つた。ひつそりした天橋立に人籟絶えて、唯何處からともなく、ざあざあといふ響がする。松風か。否、足下の松影は濃い墨もて描いた様に少しも動かぬ。音響は與謝の海が天橋一里の白砂を舐むる響に外ならぬのである。其の響に牽かれて汀に出て見る。其處に約二間ばかりの花崗石のベンチがある。腰をかける。月下にほの白く眠る與謝の海、其の懷には璧の様な月を抱き、寐息かとばかり、ざぶり又ざぶ

與謝の海

京都府丹後國與謝郡の内灣
天橋立によつて宮津灣と境してゐる
古くは宮津灣與謝海を總稱して與謝海といつた

ルビー
Ruby

宮津
京都府與謝郡宮津町



りと白砂にこぼるゝ漣は、まるで眞珠をこぼすやう。海の

南に、半圓形の山根に沿うて紅寶石や琥珀の光が點々と灣を縁どつてゐるのは、彼は宮津の町である。

橋ふと此方の海の上に、不思議な物が現れた。晃々とした明珠の幾段にも列んだ、老大な横長のものである。龍宮城の出現——と見る間に、それは宮津の方へ動いて行く。龍宮城が移動する、と見たは、それは今日

連絡船
宮津港と舞鶴港とを
連絡する汽船

の最終の連絡船が宮津を指して行くのであつた。やゝ暫く其の行方を見送る。龍宮城はあの宮津灣頭百千の龍燈晃めく邊にびたりと着いてしまつた。あととはたゞ慰したやうな與謝の海。照りまさる月の空と静かに相見えて相抱き、一里の松原枝も鳴らさぬ天橋立の長い汀に沿うて、ざぶり、又ざぶりと漣がさゝめくばかりである。汀から松原に戻つて、奥へくと砂路を歩む。さくくと砂を踏む足音の絶間に、波のさゝめきが慕うて来る。幽かに蟲の音がする。松影は益々深くなつて、はては砂の上にこぼるゝ月影がちらちらと螢ほどに細く疎になつた。と見

橋立明神
天橋立の中央部にあ
る一小祠
祭神は豊受大神

ると、こゝにひつそりと鎮ります社がある。大方橋立明神といふのであらう。松影を浴びた其の宮に、人影もない、人聲もない。燈明一つともつてゐない。余はその松に倚りかゝつて、やゝ久しく立つた。歩を返して松影から月に出て、砂路をぶらりくと又切戸の渡に來た。切戸の水は全く天河の如く美しい。汀に立つて向ふを見れば眞黒い彼岸に唯一つ赤い灯が見える。文殊の渡守が小舎の灯である。

「おーおゝい。」

渡を呼ぶ余の聲が震へて天河を渡る前、余は月の天橋の端に立つて暫く其の灯を眺めてゐた。(死の蔭に)

新國文讀本 卷一終

新國文讀本 卷一

昭和七年八月廿二日印刷
昭和七年八月廿五日發行
昭和八年一月廿二日訂正再版印刷
昭和八年一月廿五日訂正再版發行

定價各金六十錢

編者 吉田彌平

發行者 東京市神田區神保町一丁目五番地 上原才一郎

發行所 東京市神田區神保町一丁目五番地 光風館書店

印刷者 東京市神田區神保町一丁目五番地 山崎與吉



本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接に御注文被下候はゞ直に御送本可致候

文部省檢定 中學國語教科書 昭和八年一月十三日
實業學校國語教科書 昭和八年七月三十日

一三
小林
二